

候に付筑後筑前豊前豊後肥前悉く治り候然は肥後の國高鳥井の城に星野中務同民部と申者籠り居御味方不參候に依て立花左近宗茂手勢を以て押掛兩人共に被打果候肥後國中の敵城不殘明退候に付秀吉公薩州仙代川に至て御打入被成大平寺に御本陣を被居御先手十萬餘兵鹿兒島被差向候義久の一門家老會合して一同に申候は秀吉弓矢の威風を見るに水のひきゝに走るか如し今強て拒之は則ち忠久の血脈爰に於て絶ぬへし早々降參し家を立血脈を繼へしと談合を決し義久へ各存寄の處申しければ如何様共各の計ひたるへき旨被申に付伊集院右衛門太夫入道幸侃急き大和納言秀長の御陣所へ行て申しけるは義久不義は更に不及申上候然共若御哀憐ありて一身を助られは義久向後秀吉公に屬し可奉拙忠節候若又御憐み無之に於ては自裁可仕覺悟に候と御謔言申ければ秀長聞たまひ木

下半助を御使にて金吾秀秋へ被遣幸侃申上候段秀吉公へ委細可被仰上旨被仰候幸侃も半助一同に御本陣へ罷出右の趣申上若々被遂御分別候は、義久儀剃髮仕染衣にて罷出御禮可申上通申上ければ秀吉公被聞召義久事年來王道を侮り我意を恣にする故今征伐之島津一家の氏族不殘可被刎首と被思召候へ共島津氏は初祖忠久頼朝の恩賜を以て四百餘年此國を領するなれば我今義久を助置へし舊領元の如くたるへしと被仰出候へは幸侃大に悦ひ急き罷歸り此旨を義久に申せば家臣一同に悦ひ合義久則剃髮し著僧衣小姓一人召連御本陣大平寺へ被罷出候秀吉公御對面被成御懇意の御意共有之島津兵庫頭義弘同右衛門太夫俊久同中務少輔家久家老には伊集院幸侃平田美濃守本田下野守野村兵部少輔罷出御禮申上候秀吉公御對面有之後各退出仕候なり秀長へは伊集院勘解由を使者として御

禮被申上候輝元公秀家隆景元長へは馬一疋宛被進之候又古老の覺書に義久降參以前に年十六七計なる小姓隆景御陣所へ來り島津義久方より使に參り候通申に付其段申上候へは口上承り候へど被仰候に付御取次の衆御口上可承と申候へは直に口上申上御返答可承の通堅く申付候由申に付被召出御對面被成候へは御側近く參候て申上候は義久降參可仕と存候御差圖奉頼候通申上候隆景御返答に早々御降參可然存候御一戰候て後御降參候ては秀吉被思召候處如何可有之哉と被仰聞之由に候又此御陣の時御當家より御證人として毛利右京太夫殿御上洛被成候京都御滯留中様々御馳走御座候事

大隅日向御退治之事

一大隅日向兩州の侍共降參の儀不申出に付て御人數を可被差向の上意にて龍造寺政家前田肥前守利長長谷川藤五郎秀一堀左衛門督秀

政淺野彈正忠長政木村常陸助等都て其勢五萬餘人隅州へ被差向候日州へは羽柴秀勝徳川家康長岡越中守忠興池田三左衛門尉輝政蒲生飛騨守氏郷丹羽五郎左衛門長重福島左衛門太夫正則蜂屋出羽守頼隆中川藤兵衛秀政高山右近以下都合五萬人の軍士を被向候然處に義久の家臣本郷と申す士大隅に罷居義久降參の後も降參不仕候に付彼居城へ總勢押寄候へは不相叶降參の御詔言申上候に依て則下城させ城を請取相濟申候其外隅州日州の者共悉く降參仕候に付諸勢皆引取申候就夫六月上旬に秀吉公肥後熊本へ御陣を移され事

小早川隆景吉川元長闕國拜領之事

一秀吉公肥後熊本御滯留の内九州の御仕置等被仰付候此時肥後一國佐々陸奥守に拜領被仰付候て熊本の城に被爲置候吉川元長には筑後一國被下の通被仰出候へ共俄に御煩被成御養生不相叶日向の都

公直コチリと申所にて御逝去候御遺言に我等儀無實子候間藏人經言に跡職被仰付可被下候頼思召の由輝元公隆景へ被仰置候就夫黒田勘解由を以て秀吉公へ被達上聞候へは則元長如遺言被仰出經言家督の御禮被仰上候秀吉公上意に元春元長父子共に相果無是非被思召候藏人儀も忠勤を抽るに於ては國主に可被仰付の由上意候有難仕合の段被仰上御退出候隆景へは大隅豊後兩國の御誕の儀に付被仰越候段被仰渡候に付右二州の國事被仰付筑前博多御滯留の内御歸候て御出仕被成候へは此間は二州の國事等斷決致し苦勞に被思召候段御意を被成筑前一國筑後の内肥前の内相加へ七十萬石拜領被仰付の旨被仰出御指圖にて立花の城に御居城候此時小早川秀包へ筑後久留米の城拜領被仰付候城付六萬石也將又輝元公吉川經言へ被仰候は元春元長間もなく御死去一入御殘多く被思召候御自分には

諱の字を替られ可然候御家の廣の字可被進之通被成御意候就夫經言を御替廣家に御實名御改候事

豊前國一揆並城井岩石落城之事

一秀吉公同年七月箱崎を御發駕にて豊前小倉へ被遊御著豊前八郡の内六部黒田勘解由孝高殘て二部毛利壹岐守に拜領被仰付候其後赤間關御著被遊候刻輝元公へ此度の御軍勢御威の御意にて御鎧御拜領被成候其夜輝元公御膳被差上様々の御馳走御座候御膳の上にて千鳥と申御太刀被獻候秀吉公御機嫌にて則御太刀を御取被成御腰に御差被遊輝元公へ忠光の御刀被作拜領候左候て翌日關を御發駕被成陸を御登り被遊同月十四日大坂御歸城候也然處に黒田勘解由毛利壹岐守此度拜領の領知の仕置申付候へ共地下人曾て承引不仕一揆を起し城井岩石兩城へ楯籠り候に付黒田吉兵衛永正叔父黒田

兵庫助輝元公より御付被成候内藤勝右衛門人數三千餘にて城井の城へ押掛候城主は宇津宮彌三郎と申者なり此城は取分峻難の地にて多勢たりといへ共一時に押入事ならず味方危けれども救ひ助け候事ならざる所なり然れども吉兵衛自身鍵を取て眞先に掛られ候敵共思ふ圖に引請大勢突て出防戦仕る吉兵衛猩々皮の羽織を著られ候に付敵大將なりと存し目に懸て働候に付既に吉兵衛討死可被仕候處に側近く被召仕候小野江小辨年十七歳若輩たりといへども忠義の士にて吉兵衛側へ來り御羽織を被下候は、御名代に討死可仕と申理り件の羽織を著し黒田吉兵衛永正と名乗敵數人突伏せ終に討死仕る其隙に吉兵衛急難を遁れて引取被申候其後大坂へ一揆の様子被申上候へは輝元公吉川廣家急き豊前罷下り黒田に力を可添旨依被仰下輝元公は同年十月朔日吉田を御出馬被成防州山口へ

御出張候廣家は雲伯石州の人數一萬二千餘人引卒し先陣に進み關の門を渡り先岩石の城を可乗崩と被仰十月廿六日岩石へ押懸仕寄を付柵をふり敵一人も欠落不仕様に被仰付候處に城兵柵際迄切て出る廣家自身采配を取て下知し給ひ不殘被討果候其後總勢城へ乗込候時森孫右衛門一番に乗込候三村紀伊守も手勢二百にて續て乗込自身分捕仕候夫より總勢切入即時城を乗崩し候廣家は岩石落去の後小倉へ歸陣にて少し人馬を休め同十一月十二日小倉を打立城井の城へ押よせ萱切山に陣取たまふ黒田父子も二千餘の人數にて廣家一所に陣取らるゝ宇津宮は其勢三千計にて山下へ打出て備を立足輕を以てあひしらい寄手を呼引候處に古志播摩守湯佐渡都野三左衛門此者共先陣なれば敵の様體を見て一文字に切て掛る城兵一支もさへへすして引退く其後宇津宮小高き岸を前に當谷を後に

負て二手に人數を分て備を立る廣家敵の様體を見たまひ後陣の三澤方へ粟屋彦右衛門を以て被申遣候は敵の備を見るに寄手合戦をはしめは後の山より人數を廻し跡を遮さるへきと見え候間三澤一手は味方の軍に不搦敵味方の跡より懸り來るに於ては可防旨下知し給ひ既に一戦に可及覺悟に候へ共黒田勘解由方より今日の合戦御無用に可被成と頻に被申越に付合戦を止られ候翌日黒田方と被仰談敵城近く押寄せ廣家は城井谷に備を立給ふ左右は益田越中守熊谷豊前守三澤攝津守三刀屋彈正佐波越後守也越中よりも足輕を出し少々あひしらはせ候内宇津宮彌三郎降參の詫言申に付勘解由分別被仕無事に相成候事

豊前賀來福島肥後和仁邊春落城之事

一吉川廣家は豊前にて御越年被成天正十六年春同國福島三浦の城へ押寄

付城を築き人數を被籠夫より賀來の城へ取懸り稠敷責られ候へは賀來某も名を得たる勇士にて候へ共難叶降參の詫言仕致下城候福島三浦の城も同日に明渡し申候に付城を受取兩城の者八百餘人搦め取悉く首を刎られ候其後小倉へ御歸陣候然處に小早川隆景にも輝元廣家同前に豊前肥後の一揆御退治可被成旨秀吉公より被仰渡候に付備後備中の勢を被相催肥後の國へ御發向候て先づ邊春の城へ粟屋四郎兵衛朝枝右京兩人に四千餘の人數を付られ指向たまふ兩人邊春の城へ押寄責候處に弓鐵砲透間もなく打出し候に付朝枝鐵砲に中り打死仕る粟屋四郎兵衛も手負候へ共事ども不仕責詰候に付邊春某切腹可仕候間殘黨一命御助被下候様にと理申出候に付隆景被遂御分別城主一人切腹仕雜兵御助候て下城被仰付候和仁の城へも御人數向られ候處に降人に被成兩城無異儀落去に付て隆景は御

領國筑前へ御歸陣被成候吉川殿は長府へ御上著候處に又秀吉公より彌九州押として輝元公隆景廣家御在陣可有之旨被仰出に付輝元公は筑前博多迄御下向被成候隆景は肥後南の關へ御出張候吉川殿には府内に御陣を居られ候て九國の様子御聞合被遊候處に彌一揆治り候に付輝元公小早川殿吉川殿いづれも御歸陣被成候事

輝元公御上洛之事

一輝元公終に御上洛不被遊候間此度御上洛被成關白殿下へ御禮可被仰上と被思召立候段被仰出候御供の諸士は不及申又家來に至る迄美々敷支度可仕の旨被仰渡天正十六年七月七日に吉田を御出馬にて被遊御上洛候御供の大船二百五十艘有之候小早川隆景吉川廣家穗井田元清御供被成候毛利右京大夫殿も御供に候平佐伊豆守佐世與三左衛門二宮太郎右衛門此三人御船中上方御滯留中御法度の儀

申渡其外諸事可相勤之旨被仰付候同月十六日播磨灘御渡海候處に風悪く候て被遊御難儀候へ共無御別條兵庫御著船候御宿は正直屋宗養宅なり此日安國寺西堂林土佐守京都大坂御宿こしらへ其外御用等申付兵庫罷下り致出仕上方の様子委細被申上候秀吉公よりは蜂須賀阿波守大和納言殿よりは藤堂與右衛門近江中納言殿よりは白井權太夫御迎又は爲御案内者被差出候同月十九日大坂御上り被成候處に毛利壹岐守殿黒田勘解由殿毛利兵橋殿同勘八殿御迎として被差出候此衆中御船著申候處へ御出御挨拶共候て夫より濱の町布屋と申す町人の宅へ御入被成候尤兵庫大坂御旅宿へも諸大名衆より御使者御自身御出被成候御方も數多有之候同廿二日黒田勘解由殿御案内者にて御上京候御先へ京都にて御遺物金銀錢など船五十餘艘に積候て伏見へ被遣候此奉行は粟屋市佑に被仰付候御供

の總人數三千なり又内に至る迄さらをみかき金銀の鬘斗付の大小をさし衣類等だてに仕著致し候此時御近習衆六十人人柄を御撰ひ候て御供に被召連候銀の鬘斗付大小を御さへせ被成あかねの一重物御著せ候處に大坂御著の上右のあかねを著仕候へは町人の下女迄笑ひ申に付外へ出申儀も不相成俄に帷子被仰付被遣候て京都御供仕候西國御大名衆は御迎に途中へ御出被成候其外は御使者被差出候に付洛入の御人數は五千程御座候由に候其日申の刻京都被遊御著直に道三宅へ御落付被成候道三老へ白銀百枚内室へ三十枚被遣候様々御馳走被申上候御供の衆へも料理を出し被申候左候て廿三日妙願寺へ御宿替被遊候へは關白殿下より石田治部少淺野彈正少弼兩使を以御懇意の上意にて米千石御拜領候大和納言よりは黄金二十枚御帷子二十五八木五十石御使者を以て被進候御在京の

三百三十四

御大名不殘被成御見舞候いつれも御進物品々にて候同廿四日に聚樂御城へ御出仕候先淺野彈正殿宅へ被成御座御時分御聞合被遊御登城被成候御献上物は

白銀三千枚 御太刀金作 御馬一疋月毛

御鷹五羽

右は關白様へ

沈香百兩 虎皮十枚 御太刀一腰

右金吾様へ

白銀二百枚 白糸三九折三つに疊之

右政所様へ

秀吉公出御御對面御著座之次第

上段 秀吉公 御同席 聖護院御門跡

御次之間客居

輝元公 蜂須賀出羽守 小早川隆景 吉川廣家

主居

前田筑前守 安國寺西堂 長岡越中守

島津兵庫頭 立花左近將監 龍造寺

金森兵部卿法印 施藥院

向之御椽通

穗井田元清 福原元俊 口羽春良

御座敷被召出御對面之衆

渡邊石見守 赤川十郎左衛門 内藤權右衛門

井原四郎兵衛 熊谷玄蕃 國司藤兵衛

熊谷七郎兵衛 栗屋右京 兒玉三郎衛門尉

檜崎彈右衛門 松山源二兵衛 堅田彌十郎

栗屋内藏丞 兒玉仁右衛門 林 土佐守

以上十五人

右御太刀御馬にて御禮申上候事

一同廿五日輝元公御參内

御劔 赤川十郎左衛門

御沓 渡邊石見守

御獻上

禁裡へ 御太刀 白銀百枚

女御へ 白銀一折

准后へ 白銀一折

天奏 勸修寺大納言殿

紫宸殿御著座

天子御對顔天盃御頂戴清華の家に准せられ御本所と申奉る四位侍從に叙任被遊候隆景廣家は五位の侍從にならせられ候御三人共に豊臣の姓を被下桐の御紋を被許候其後輝元公禁裡被明御隙御退出候て黒田勘解由殿御案内者にて公卿其外大名衆へ御出被成御歸宅被遊候同廿八日には秀吉公御茶可被進の由被仰出早天に聚樂の御所へ御出仕候御茶の時は輝元公隆景廣家末座は宗及なり御茶相濟辰の刻御宿へ被遊御歸候押付巳の刻御參内御劔國司助兵衛御沓福原式部少なり秀吉公被遊御同道四足の御門より御參内被成紫宸殿御著座其以後清涼殿にて御三獻の上天盃御頂戴被任參議候隆景廣家は四位の侍從に被爲成候諸大夫は穗井田元清福原元俊口羽春良渡邊石見守松山源次兵衛堅田彌十郎林土佐守布衣は國司助兵衛粟

屋與十郎同廿九日昨日官位被仰付候御家中衆參内可仕之旨被仰出參内仕候處に口宣を頂戴仕豊臣姓を被下御一門に被仰付難有仕合にて退出仕候位階は孰も從五位下なり左候て名替被仰付候穗井田治部少は越前守福原式部は上總介口羽伯耆は三河守渡邊石見守は飛驒守松山源次兵衛は兵庫頭堅田彌十郎は兵部少林土佐守は肥前守國司助兵衛は隼人佐粟屋與十郎は右近將監に被仰付右之内口羽春良計御理被申上伯耆守にて被居候扱又輝元公八月中は京都御滯留被成所々御見物被遊候然處に八月七日に熊野太郎右衛門を黒田勘解由殿へ御使に被遣候に付御宅へ參候へは近江中納言殿へ御出候故先様參候て御口上申上御返詞承り罷歸り候刻日暮申に付盜賊共二十人計出合取籠め討死可仕の處に能働き追散し無異儀罷歸候無比類手柄仕候とて洛中取沙汰仕候又輝元公聚樂にて御屋敷御拜

領被遊候表六十五間入六十間にて候御屋敷の前は前野但馬守殿右
は備前宰相殿左は上杉殿にて候則御普請被仰付候奉行は林肥前守
兒玉利右衛門木工允なり

一同月十五日秀吉公大佛にて名月御遊覽可有之旨被仰出候へ共雨天
に付聚樂へ還御候就夫輝元公其外諸大名衆聚樂へ御出仕被成候何
れも一種一瓶被差上候秀吉公御機嫌能御詠歌御座候三十首のさく
り題にて

詠八月十五夜和歌

關白豊臣秀吉

名も高き今宵の月の音羽山詠めにあかし夜は更ぬとも

新秋露

御同人

來るあきのかつ色見する草村に露置そふる朝はらけ哉

御同人

今宵見る月のかつらの花も咲秋の詠もさかりなるらん

社頭祝

聖護院道澄

猶祈れ天津社の木綿たすきかけつゝ君か千代の行術を

名月

參議豊臣輝元

君か代の名もたかしてふ秋の月幾年々の光りそふらん

曉初雁

御同人

かり枕かた敷あへす秋の夜の夢さそひゆく初雁のこえ

豊臣隆景

治れる世をこそ仰け九重の今宵の月を見るにつけても

豊臣廣家

玉敷の砌りやこよひ久かたの月の光りをなほ照すらん

諸大名いつれも御詠歌有之

一同月廿六日禁裡より御暇の勅使勸修寺前内府同大納言殿被成下
繪旨

吳服十 輝元へ

同 貳 同御簾中へ

右被遊御拜領候次に赤川十郎左衛門儀布衣になし可被遣旨被仰出
同廿八日に立烏帽子狩衣にて參内仕きさはしにて御禮申上候從五
位下に被仰付主水に致名替候其上豊臣の姓を被下難有仕合にて退
出仕候

一同月廿九日に道澄御案内者にて大津へ御見物に御出被成三井寺其
外名所被遊御遊覽石山寺へも御參詣被成候此時道澄より御短冊を
被爲進候其御歌に

見せはやと思ひし秋の色薄きなからの山に志賀の浦波

輝元公御返歌

海山の名にしおひたる秋の色に深き心の程は見えけり

御宿は花光坊に被成御座候

一同九月三日京都被遊御出馬八幡へ御參詣夫より奈良御見物に被成
御座候處に大和大納言殿様々御馳走にて下々に至迄賄等被仰付候
同七日奈良御出馬くらかり峠御越候て河内の松原の市へ御通り被
成大坂御下被遊候に付御登城候へは又御馳走不大形候此間の御禮
ども被仰上同十二日大坂御出船被遊候兵庫より明石迄は陸を被成
御座明石より御船に召させられ候明石にて森勘八殿毛利の御字被
進候黒田勘解由殿御取持にて候左候て備後尾道へ御著船被成候此
所へ吉田より各御迎に罷出候尾道よりは陸を御歸被成九月十九日
吉田御歸城被遊候今度御在京中御劍の御役は赤川主水正國司隼人

佐粟屋右近將監御奏者御座敷奉行は熊谷玄蕃國司藤兵衛粟屋右京
兒玉三郎右衛門粟屋内藏丞檜崎彈右衛門御右筆は佐世與三左衛門
御臺所奉行は二宮三左衛門に被仰付候

一御在京の内秀吉公上意に吉川藏人儀于今妻女無之候由に付縁職可
被仰付と候て浮田秀家の御姉を御養君に被成候間急度婚禮相調候
様にと御意に付同年十月に婚禮被相調候秀吉公よりの上使の黒田
勘解由殿秀家よりは富山半右衛門土居甚四郎兩人御付候て上方よ
り新庄へ御下向候則首尾能御祝言相調申候然れ共御不幸にて御子
様出生無之内御逝去候事

廣島へ御城地被替候事

一天正十七年二月廿二日御城地爲御見立輝元公吉田御出馬被遊福島
大和守宅へ被成御下己斐理右衛門福嶋大和守御供に被召連明星山

へ御上り被成御城地御見立被遊候處に神領の五箇村可然地なりと
御意にて此地に御議定被遊候同三月十七日日柄能候に付福島大和
守に歟初被仰付同四月十五日に二宮信濃守被召出重役太儀なから
御城繩張仕御普請奉行可相勤旨被仰渡候信濃守御請申上聚樂の御
城を繪圖に寫し繩張仕候左候て五箇村を改られ廣島と號せられ候
儀は御家の廣の字福島の島の字御取候て如此に候廣島の二字續き
やう歟初御普請はしめなどの日柄は明星寺と申て眞言宗の寺御座
候此住持に被仰付候文祿二年に御本丸の御普請相調被遊御入城候
材木は宇賀山と申山より切出し申候行程十二三里も可有之候竹は
吉田御城廻りに二人持の大竹も御座候に付採用被仰付候金銀米錢
の御造佐の儀も二宮才覺を以御領國の町人百姓に至る迄持合候十
分一御借用被成三年目に元利共に御返辨可有之通申觸候皆御用被

仰付忝奉存候に付有の儘に申出十分一御用に立申候御領國八箇國にて候故餘り申程御座候御調の儀御藏入過分に無之候間如何可有御座哉と諸人取沙汰仕候處に大小身共に國衆へ申渡候は御軍役の時遠近に隨ひ役儀被仰付候爲に候各持掛りの領知石高付出し候様にどの事に候近年引續軍役相勤不勝手に罷成候に付大形みな石高の付隠し仕候其付出を以棹を入檢出の所悉く被召上候へ共各御理も無之候其檢出の米を以三年目には御調切被遊候二宮才覺仁にて如此に候事

小田原御陣之事

一天正十八年北條氏政父子爲御退治秀吉公御進發候聚樂御留主居には大和大納言秀長卿毛利右馬頭輝元公御兩人被指置候然處に秀長卿其年御逝去に付輝元公御一人にて御留守御勤被遊候小早川隆景

は尾州清洲の城に被差置候吉川廣家は參州岡崎の城に被爲置候中國の總人數は皆御供仕候豆州下田の城を中國衆に就被仰付吉見三河守益田越中守山内大隅守宍道五郎兵衛阿曾沼豐後守以下人數一萬にて下田の城へ押寄せ取圍み責申候城中へ申入候は天下を引請御籠城尤神妙の至に存候乍爾後詰の御頼も無之候へは御運ひらかるへき道無御座候間一日も早く城を御渡可然存候互に人質を取替し御氣遣無之様に可仕と節々申入候へは城主領掌仕降人に罷成城を明渡し下城仕候御船手も軍船數百艘小田原の沖にかけ置警固仕候左候て後小田原落城仕同十九年奥州九の部迄秀吉公被向御馬平均に被仰付御歸陣の刻岡崎の城へ被遊御立寄に付廣家被罷出候て此度御勝利の嘉詞被仰上御膳被差上候秀吉公御機嫌能御馬拜領被成候其後家康公岡崎へ御入城被成城中被遊御覽何邊念を入被申付

殊更御座之間用捨被仕候通被聞召及御祝著に被思召の通重疊忝御意にて御暇下され廣家は京都御上り被成其後御歸國候處に秀吉公御意に吉川領知の儀伯州半國雲州にて三郡隱岐一國藝州新庄にて一萬石輝元より配地仕り富田に居城たるへき旨被仰出頓て富田へ御入城被成候又小田原御陣中に隆景御事御用有之候間可有參上候旨被仰越則小田原へ御越被成候處に御本陣被召出此度の御陣中の儀とも御物語被遊候て箇様に大軍を以て敵を取詰永陣の儀元就は如何様に被仕候哉と御尋被成候隆景御返答に諸軍勢勞れ不申様に被仰付緩々と御責させ被成候は、頓て城中より返り忠の者出來可申候左候は、案外早く落去可仕様に奉存候と被仰上候へは御自分にも左様にこそ被思召候と御意にて御機嫌能御座候其後陣中諸軍に茶の湯など仕り致酒宴亂舞仕り心を慰め候へと被仰渡候左様候

て隆景御滯留中に湯本の湯へ秀吉公御入被遊候間御伽に入可申の通御意候て御供被成候刻隆景御下帶布にて御座候に付如何可有之哉と各申候て御歎息候へ共無之處にいつれか御近習の者ひの、下帶持合居申候に付其段申上候へはそれを御むすひ被成御入湯の由申傳候事

輝元公朝鮮御渡海之事

一關白秀吉公朝鮮御征伐に付文祿元年三月總勢渡海仕候其時輝元公御人數三萬にて被遊御渡海候吉川廣家御自分の五千にて御先手被成候廣嶋御留守居は佐世石見守なり小早川隆景は筑前國主たるに付別に一列の御備定にて御手勢一萬人御相備には久留米侍從秀包千五百人立花宗茂二千五百人其外宗茂弟高橋主膳筑紫上野介輝元公よりの御加勢毛利大藏太輔元康都合一萬五千七百人の御備なり

輝元公は八列目の御備定に候御名代浮田秀家の御備共に九段の御備付に候輝元公釜山浦御著船被遊則釜山浦の城に御座被成其後朝鮮の都近き所開寧と申す所に被遊御在陣山上り仕候朝鮮人色々御手立被成在所々々へ下居被仰付候御下知に隨ひ申候在所への印の幟御立させ被成人別に札を被遣候隨ひ不申所へは御人數を被遣御退治被成候うるしゆんうふんと申す所の者隨身不仕殊に手強く五三度も此方の足輕共を追立申に付宍戸備前守へ退治可有之と被仰出候に付則元續相備衆同道にて被參郷人數多打果し獄門に懸生捕百五十人餘はり付に懸させられ候に付降參仕下居致し候又中渡りと申す所に傳城御築候て野島三郎兵衛方被籠置候へは朝鮮人多勢にて押寄責申候折柄元續家來末兼孫兵衛淺原備後三浦四郎兵衛三人中渡近所へ相働き城の様體を見及敵を押分切拂ひ城へ籠り加

勢仕に付三郎兵衛運をひらき申候此時三浦四郎兵衛藪木四郎右衛門討死仕候手負も十三人有之候宍戸家來働の様子野島方より委細に申上候に付輝元公被聞召被遊御感候然處に吉川殿より被差出候打廻りの者共罷歸申上候はれいせんと申す所より一里計此方に人數三四萬も可有之候山上り仕居候通申上る廣家被聞召先つ山下に札を建下居させらるへきとて札を建候其札に日本將軍朝鮮渡海の儀全く別の子細にあらず國政を能執行ひ民を安く置へき爲也早速在所々々へ罷歸家業を勤可案堵と書て山下に建させられ候へは山より三十人計下て此札を得と見て打碎き捨候に付又右の趣書簡に調へ竹にはさみ立られければ是非一戦望みの由返答仕に付更は望にまかせ一戦すへしと返詞ありて則敵陣の山下へ押寄給へは敵大勢打下し半弓を揃へ射立手強く防戦仕候廣家自身眞先に進み五千

の人数を以て一文字に懸り敵の先陣を突崩したまへは後陣一時に崩れて敗北す其時味方備を亂して行程二里計追打に討取首數三千餘級なり日既に晩景に及ひければ以前の備場へ歸り其夜は御陣を居られ翌早天にれいせんの館へ押懸たまへ共皆欠落仕一人も居不申に付御本陣へ歸りたまふなり

秀吉公名護屋御下向之事

一文祿元年三月廿六日秀吉公京都御出馬被遊其夜は攝州茨木御泊なり四月初旬藝州嚴島御遊覽候刻此島に奇景勝れたる瀧あり瀧の風景によせられ御詠歌共有之夫より廣島の御城へ入せられ一日御滞留被遊候輝元公朝鮮御渡海の以後は渡瀬小次郎と申す仁を秀吉公より城番に被差置候就夫右京大夫殿は御留守に被成御座候へども新山の安國寺へ御退被成候廣島安國寺の間七里有之由に候秀吉公

御機嫌能御滞留の内右京大夫殿御事御前被召出様々の御咄の次手に輝元の養子には此右京大夫可然被思召候間御意の趣高麗に至て輝元へ可申聞の由佐世石見桂源右衛門へ木下半助殿を以て被仰渡候此半助殿は御前第一の出頭人にて候故此御方よりも取分御馳走被遊半助殿も御入魂に付萬事申伺御差圖を請申候右京大夫殿へ御腰物時服被爲作拜領御出駕被遊長府へ御著候て仲哀天皇神功皇后の社祠を御禮拜被成夫より關阿彌陀寺へ御座被成安徳天皇の肖影其外平家一族の畫像御覽候時古人の詩歌を詠し置しを寺僧講釋仕候秀吉公被聞召御機嫌能御座候其刻佐世石見守御機嫌伺に罷出候ちしやをたはね臺にすえ差出し候へは則御目見被遊此間御望に被思召候一種差上御満足之通御意被成御料理人を被召出此ちしやを御汁に仕候へ切候へは風味不勝候間ねちさり御汁に可仕之由御意

候て又此間被召上候御食しらせ不足に候鹽を入候てつかせ候様にと被仰付之由に候石見守儀も首尾能御暇被下退出仕候左候て翌日關の門御渡り被成追て名護屋御著陣被遊候御供の大名衆には松平家康公一萬五千人大和中納言秀俊一萬人前田利家九千餘人其外織田信雄上杉景勝奥北國の勢都合八萬餘御旗本雜兵共に三萬人總て十萬餘の御人數御城前後左右に陣を取候事

秀吉公御召船於豊前大裡沖掛生石事

一毛利右京大夫殿へ木下半助殿より御内意被申越候は御見舞として名護屋御下被成可然候との儀に候就夫同七月十七日御聞掛に御出足候て翌十八日下關御著候然處に大政所様御煩に付秀吉公御上洛被遊候今日小倉御著候通風聞有之候秀元被聞召飛船を以て木下半助殿へ御問合候處に御返詞に明朝未明に御出船被遊候間早々小倉

へ御出仕可然の由被申越候に付夜中御渡海候て朝五つ時御本陣御出仕なされ半助殿御相對被成候へは只今御膳被召上候乍去御膳の上可申上とて御披露有之候處に則ち御前被召出爲御見舞御出仕御祝著の旨御意被成御盃被遣御前御退出候半助殿御同道にて御表へ御出被成候時半助殿桂源右衛門へ被仰候は秀吉公陸地御登り被成候は、廣島へ御立寄可被成の由御意候間右京大夫殿御事御急き候て御先へ御歸候様に可仕の通可被仰候御座船は櫓數にて候間何と被成候ても御先へ御座候事相成間敷と源右衛門存し候て居申候處に御臺所口にて又掛御目候に付源右衛門儀半助殿側へ參り候へは何の用そと尋ねられ候源右衛門承り先刻は右京大夫殿御先へ參り候様にと被仰下候へ共御座船は櫓數にて候へは難成奉存候と申候へは半助殿聞れ候て御跡にても不苦候多分廣島へは御立寄も被成

間敷候乍去急き候へと被仰候に付其まゝ右京大夫殿を御船に召させ見候へは御座船ははや陸より五六町沖を御上り被成候此方の船は御座船より陸の方を参り候少しの間に御座船は半道計も延申候然處に御座船より御跡船を急に招き申候を福原大炊見付候て此方の船頭を呼候て御座船より御跡船を招き申候彼邊に生石などは無之哉と尋ね候へは船頭承りいかにも御座船は生石に乗申候と申すに付さらば此船を押付候へと源右衛門申付右京大夫殿にも御自身取梶面梶御走廻り候て舸子とも精を出し候へと御下知被成候左様候に付歴々の御供より先へ御座船に押付候其時御座船より年の頃三十計なる健なる男二人岩の上へ下りられ候秀吉公は御はたかにて御座被成候半助殿御後より抱へられ右の兩人此方の船へ召候様に仕られ候へは此方の船も岩に乗申に付いかゝ可仕哉と源右衛門

も存し煩候處に此方の手安船御座船と此方の間へ押入申候奇特の仕合に候大閣様も兩人の仁も手安船へ召候に付源右衛門御側衆へ向候て是は右京大夫船にて御座候召させられ候する哉と申上候へは御直に可被爲召の由御意被成候て御手を差出され候に付源右衛門片手にては八帆柱を取片手を差出候へは御取付候て船へ召し屋形の内へ御入被成候十七八計なる御小姓練の羽織をぬき御後よりめさせ被申候源右衛門申様に此船をは關へ著け可申候哉直に上方へおさせ可申哉と伺ひ申候處に御側衆返答不被申内に此磯へ著け候へと直に御意被成候故大裡の濱へ著申候へは則ち御上り被成舸子の持候櫃の上に毛氈を敷御腰を掛られ沖の方へ御向候て御供船いつれも此磯へ著け候へと御意候に付各の船共悉く磯へ著け上り被申候人數六七百も可有之候御前には御伽衆數多居被申候樋口な

とも罷居候其時御意に今日右京太夫忠義無比類候戰場にて深入をし及難儀候刻横鍵は常に有之事に候如此人の命を助け候事は無之儀なり總別あの子は只者にてなく候左様に御覽被成候に付廣島にても輝元養子には太夫可然と謂候なりまた輝元養子に金吾可然との事被聞召候是は何者の申たる事に候哉左様は有間敷候我等も辛勞候て取候天下を他人に可遣とは不思候其故遠親類に候へ共治兵衛に譲り天下に置候輝元は親族數多有之候いつれ成共輝元隆景了簡次第たるへく候金吾おもひもよらざる事なり何者の箇様の儀言廻りたる哉と尋るに黒田勘解由め言廻りたる由に候中々曲事の儀といふことなりなど、御意被成候御側近く秀元も御座被成候に付此子か輝元養子になるましまし事にて無之一段可然と被思召候間彌此通りを輝元へ申遣し候へと重疊御意被成候扱又輝元隆景は身か

用に立人にて候間猶々能被成候て被遣度被思召只今の國は京近く候間九州を望に候は、九州九箇國に長門一箇國添て十箇國可遣候いか、候する哉と尋候へは輝元隆景御意次第は奉存候如何様にも御誼次第といふ程に御意次第ならば望次第と尋はやと思ひ其方望次第と思ふに付てこそ尋ぬれどもかふも心次第なりといへは御意忝く奉存候父祖代々の國に候間今の通りに罷居度といふほどに心儘にとて前々のことく申付候かほとにこそ思ふ兩人を逆意などといふ事曲事なり扱々にくきやつめなりと御意候處へ半助殿小菊と申す小は、なる紙に書たる物を御前へ上られ候を源右衛門を召候て是を大夫に見せ候へと御意被成御渡し候に付則ち御前にて秀元へ進申候へは御懷中被遊候左候處に御座所より二三町東の磯へ小船を著候てさいみのかたひらに小紋の袴著申候大男の兩手をとら

へ數人付候て御座近く參り候明石與二兵衛と申總船頭の頭なり各は御伽衆などにて候哉と存居候處に御座所の後六七間ほどへ參候秀吉公御覽候て今少し此方へと御意被成歩みより申候處を年の頃十八九計なる若き人後より彼男の首を二刀に打落し申され御前へ持參候早川主馬殿子息源吾殿と申仁の由に候太閤様御覽候て近頃にくきやつめなり見こらしの爲に候爰に則ち獄門にかけさせ候へと御意にて梟させられ候扱半助殿御挾箱を御傍へ持參候て御脇差を被取出候へは大夫殿を召候て忝御意にて御拜領被成候此脇差厚藤四郎吉光なり桂源右衛門伊秩安房守兩人被召出御羽織被成拜領候其儘御船に召候て御登り被成候大夫殿も御跡より廣島御歸被成候處に木下半助殿より奉書を以て早々御上京候様にと被申越候に付早速廣島御出船候て御登り被遊候處に大政所様御逝去に付御目

見も不相成御滯留候て九月に御忌中明き名護屋御下向の刻半助殿へ御問合被成候へは明日未明に御出駕候間其御心得被成候て御出仕御門にて御目見可然の由被申越候に付一番鶏に御支度候て御登城候へははや御出駕にて候御跡より御急き被成牧方の御茶屋にて御追付候て御門にて御目見被遊候處に御意には侍從に被仰付候委細立以法印へ被仰渡候間早々御上京候様にとの儀に候て御仕合能御上洛候へは立以取持にて首尾能御參内被成御官位被遊候此時秀元御年十四歳なり

輝元公御病氣之事並秀元爲御名代朝鮮御渡海之事

一於朝鮮輝元公御氣色不相勝秋の末に成申候程寒氣も強く御座候に付御機嫌彌御滯り被遊候故下々迄氣遣ひ不大形候隆景廣家御談合候て兎角醫者の儀名護屋被仰上可然との儀にて柳澤新右衛門を爲

御使名護屋へ被仰上候へは秀吉公被聞召延壽院玄朔道三渡海被仰付候道三渡海の上御藥被差上候處に成程御相應にて頓て被遊御快然道三歸朝被仕候刻御禮の御使に林肥前守儀名護屋被差越候され共甚敷寒國にて御座候故御氣色得と御本復不被遊候に付爲御名代右京大夫殿朝鮮渡海被仰付候大夫著候て輝元は可有歸朝之旨就被仰出文祿二年三月廿日右京大夫殿藝州廿日市御出船候て名護屋被成御著御登城候へは秀吉公御前被召出御茶被下其上にて忝御意なと御座候て時服御拜領被遊候桂源右衛門をも御前被召出御羽織拜領被仰付候其後大夫殿釜山浦御著船被成候上にて輝元公は御歸朝被遊候林肥前守事年内は在所罷歸可致休息候來春輝元代りに右京大夫渡海可被仰付候間右京大夫に付候て渡海可仕之旨被仰出年内は休息仕秀元御渡海の節朝鮮國罷歸秀吉公御意之趣委細に申上候

事

小西行長平壤之城明退事

一 小西攝津守行長は一之御先手たるに依て加藤清正一同に都を出馬し關城の大河を越て平安道を押行明國の遼東界平壤のばてんの城に在陣し明兵の來るを待平壤の地形は東に大同江あり西北は山なり城より二里計有て牡丹臺といふ山あり臺の側に柵をふり堀をほり端城に構へたり平壤より都迄の間には傳の城あり小西在陣のばてんより八里都の方ゑなんの城には大友豊後守義統其次べくさんには小早川秀包其次うはんの城には吉川廣家家來香川雅樂助森脇加賀守其次河安の城には黒田甲斐守家來栗山四郎左衛門關城には小早川隆景吉川廣家立花左近其外隆景御一手の衆はちうには黒田甲斐守如此都迄の間に陣城を築き各在陣被仕候然處に行長朝鮮の

僧玄蘇を使として朝鮮の王李暉に告候其趣には日本與大明構兵是似不敵也雖然是秀吉之命也豈可違乎夫吾國混一之後國饒民殷既無奪國之望况有貪財之意乎秀吉欲伐大明者爲報怨也朝鮮介于兩國之間是故路經朝鮮若屬麾下則何攻屠乎然其不屬之而完郭郭聚民黎以拒我兵故今如此聞大王欲屯于鴨綠江鳴鼓而攻之在近年李暉大に驚き則行長より差越候書簡を大王に捧て援兵を乞れければ明帝諸臣駭騒き倭の朝鮮を犯し中國を窺ふこと二百年來不見聞早速援兵を可遣とて催されけれども頃年兵亂に付大軍の催し難成先づ遼東巡按李時孳遼陽守道荊州俊帝の命を受けて遼の將承訓吏儒に三千の精兵を付朝鮮を救はれ候既に同年七月鴨綠江を涉りて平壤の安定館に陣取此段委細松井物語に記之に付令省略なり扱行長明兵の來るを聞て夜中に足輕を遣し鐵砲を打せければ敵驚き騒くに付翌日行

長逆寄に押懸悉く打果し候吏儒は戰死仕る祖承訓は逃て一命を助るなり漸く生て明國へ歸る者十餘人有之明帝諸臣驚て大軍を催さる、朝鮮の事を司るは司馬石星といふ者なり石星思案するに大軍を催す時は必ず日數を経へし其内行長をなため和平の儀を説しむへしと沉惟敬と云者と内談して和平の儀を行長に謂はしむ惟敬帝王の千金を散し土産の卷物其外進物を調へ朝鮮に來り先づ使を行長方へ遣し趣をしらしめ心底を試むる固より行長は和親を望むに付乾伏山と云山の麓にて惟敬に出逢對面して事の子細を尋るに大明日本和親の契約を堅くして四民を安く治め至後年も無異儀日本の望に任すへしといふ其時七箇條の書立を以て此趣一箇條にても違變あるまじとならば和議の儀可領掌といへは惟敬聞て一箇條にても違變ある間敷と同意するに付都へ飛札を以て委細に申越候へ

は奉行衆諸將も歸朝を願ひ候折節なれば無別條同意候に付行長惟敬を招き足下明朝に歸り趣を帝に奏し官使を日本へ差越たまは、彌交親のしるしたる此儀五十日を限り可被調候若延引せは和親調ふべからすと約束する都在陣の諸大將も此儀を誠なりと存せらるゝに付敵城をも不責して空しく日を送る然は石星思ふまゝに行長を出し抜明帝に奏し李如松を大將に仕り五萬餘人の兵を付て朝鮮を救ふ如松兵を分て三列とす楊元中列たり如松右列にあり張世爵左列たり吳惟忠と云者南兵三千を卒して右列に屬す十一月廿七日山海關を出て十二月廿五日鴨綠江を渡り其後安定館に陣を取朝鮮の軍士相加り凡其勢二十萬に及ふなり行長敵の心を見るへきと存し以前の如く足輕を遣す處に明兵の將李寧と云侍出向ひ足輕を追立七人生捕ければ行長も城を不出敵の寄るを待居候城に籠り候行

長の人數一萬五千なり然るに明兵の三將等兵を進めて先づ牡丹臺を攻る城兵手強く働くに付吳惟忠に牡丹臺を攻させ三將共に平城へ押寄る其夜半に城より人數を出し戦ひけれども城兵負て城に歸る翌日敵三方より寄て均しく城を攻候明兵少し攻かねて見ゆる時行長城戸を開て突て出相戦ふ刻城の西の方防くへき人數無之を張世爵よく察し急に攻込関を揚る行長不叶して本城へ引入防戦する寄手大勢なればつとひ來るを的にして鐵砲にて打に付化矢一つもなく候日既に暮ければ如松兵を退く今日城兵討死一千六百餘人明兵の死する者數千人なり行長城兵と考檢するに或は討死或は欠落仕り殘る所のもの五千人計有之就夫家老共を呼て申けるは此小勢を以て大敵に勝へき道理なし大友義統其外の衆へ後詰の事申遣すといへとも于今不來候間一先此城を退去し後日に有無の一戦すへ

きと思ふなりいか、可有之哉と談合する各一同に御尤なりと申に付平壤を落て大友陣所なるんの城へ行義統は臆病なる大將なれば大明の大勢平壤を圍むと聞て都へ歸るへきと存しられ候折節逃來る者共大明の百萬騎小西殿を取かこみ候最早頓に可爲討死早々御引取候へと聲々に申を聞かれ取物もとりあへず逃落小早川秀包の御陣所まで退被申候秀包立腹し給ひ義統に向て小西討死實否をも御聞届無之御引取候儀不及是非とて秀包の陣所に留置都へ注進させられ其後義統明退被申候なるんの城へは吉川殿家來香川森脇に五百人の人數を付又秀包よりも五百人黒田甲州よりも五百人都合二千及びひの人數を籠置れ候扱先李如松事小西退去候をは不知して翌早天に城へ寄て見れば城兵一人も不居候に付行長を討洩しけるとて如松腹を立早速に追掛討取候へと下知すると雖も備の行列を

不亂令法正しくして追掛るに付行長安々とゑなんへ八里の道を経て著仕り義統はと問へは城番の者共罷出大友殿は頓に此城を退被申に付小早川秀包吉川廣家黒田長政より人數を籠置申候定て御退被成是迄御越可被成と存し待居候今夜は當地に御一宿候て人馬を御休め可然と各申候へは小西悦ひ其夜はゑなんに休息にて翌朝は三家の人數を殿にして秀包の陣所へくさんの城へ退申候秀包出合申されければ小西秀包に相對し明國の大兵頓て押來り可申候大勢に取こめられ候ては難叶覺え候御引退候様にと申に付小西大友を先へ出させ秀包殿にて黒田甲斐守殿陣所かあんの城迄引取被申候吉川殿は關城に在陣候に付味方敗軍を聞たまひ河南の城へ出合敗軍の衆に相對させられ候時小西申候は秀包長政も都へ御歸尤に候御同道可申といへは兩人返答に敵の旗先をも見すして退申候儀い

かゝに存候小早川隆景と一所になり候て明兵と遂一戦可申候貴所は都へ御歸あるへしと申され同心なく候に付小西一人都に歸り申候秀包廣家長政は河南に一夜在陣あつて翌日は隆景御陣所關城へ引取被成候路次につかれ又は病人御座候を廣家御覽候て馬に乗せ被召連候て主人へ御渡にて候都にて三奉行衆其外も小西敗軍に付中々驚き申され則ち小早川隆景へ使者を以て急談御座候間早々都へ御歸り候様にと被申越候隆景御返答に我等事日本を出候時より二度歸帆の心無之候明兵と遂一戦命を戰場に捨候儀老後の太慶不過之候我等戦死仕候とても秀吉公の御損失にても有ましく候百萬の大兵來り候とも爰を退去仕候事有間敷候と被仰使を被差返候使の者罷歸り三奉行へ御返詞申候へは三成を始めあされてもの申者も無之處に大谷形部少申候は我等隆景迎に參り候て必ず致同道歸

り可申候御待候へとて急き關城へ參り隆景に相對仕御返詞承知仕候御尤にては候へとも日本と大明と引分の合戦此度に相極り申候衆議一味の談合一決し其上にては各一等に身命を捨候儀本意に候御老功の儀に候へは萬事談合可仕の旨大閤も被仰付候命を捨候儀は匹夫も同前にて候早々御同道可仕候爲其御迎に參り候通被申候へは隆景御挨拶に手前には御使被下候刻可罷歸と存候へ共吉川を始め若き者共兎角一戦可仕と申に付及延引候と仰せられ候廣家なと被仰候は老人の隆景此時と存し極め候様體に候へは各は一入いさみ罷居候と被仰理候て各一同に刑部少被致同道都へ御歸り候事

江陽合戦之事

一明の大兵押來るに依て諸將悉く都へ會合して軍の談合有之處にはや關城表へ著陣の由告候に付大名衆より一日代りに張番の人數被

差出候文祿二年正月廿五日宇喜多秀家の御番にてはしう江陽まで
 人數被差出候處に江陽の阪下に伏兵を置候を一圓不存候て江陽へ
 人數を押申候處に待請伏を起し射立候宇喜多衆も取合せ鐵砲を打
 掛戦ひ候へ共思ひよらざる儀なれば不相叶引退候翌廿六日小早川
 隆景御番前にて候故夜半より支度仕り罷出候一之先粟屋四郎兵衛
 二之先井上五郎兵衛各三千宛其次は隆景御旗本一萬人脇備は立花
 左近宗茂二千五百人舍弟高橋主膳正一千人久留米侍從秀包毛利大
 藏大輔元康筑紫上野介都合六千人江陽表へ押出候處に立花殿衆と
 大明勢闇の夜に途中にて行合互に弓鐵砲にて打合其後は鍵刀にて
 相戦ひ候明兵は多勢にて候故立花殿衆能侍三十六人討死仕る闇の
 夜にて候に付此方より助け合申事不相成右之通にて候夜明候て見
 申候へは江陽の大郷に大明勢充滿し此方へ旗を進め候吉川殿より

今日は人數出し申筈に候へ共明廿七日張番にて御座候に付様子御
 見せ可被成と被仰福富與右衛門境與三右衛門に鐵砲百挺御付候て
 被差出候都より二里計出候處に明兵百騎計馬を乘來り候立花殿衆
 見候て則突てかゝり候へは一支も不仕逃歸り候彌江陽を見候へは
 郷中に餘程人數有之て此方へ押來候に付吉川殿衆もはやく引取柳
 の一村有之處に鐵砲を備へ待居候へは敵の先勢押來り候に付化矢
 もなく打申候へ共物の數にも不仕候此時境與三右衛門主從三人討
 死仕候福富は切抜無異儀罷歸り候都の諸將取物もとりあへず洛外
 に出一所に集り我等先を可仕と聲々に被申候隆景被聞召拙者存候
 處も有之先陣は老人にても候へ共手前に可仕候大明と日本はしめ
 ての軍其大事今日に相極り候張番に當り人數を出し置候儀幸に候
 兎角先陣可仕と被仰候各得と合點不被申候へ共三奉行承届られ誠

に大事の合戦今日に相極り候御老功と申し張番の當役にて人數出し置被申候間隆景御先陣たるへきと被申に付て諸將も合點被仕隆景御先陣被遊候御備定は前に記し候通粟屋四郎兵衛氏春人數三千にて一之先なり井上景貞是も人數三千にて二之先なり隆景御旗本人數一萬にて七八町程後に御備を立られ御旗本脇備は立花左近宗茂二千五百人舍弟高橋主膳正一千人小早川藤四郎秀包毛利元康筑紫上野介合人數六千人也御脇備衆へは能時分に横鎧を入可申通被仰聞せ候左候て待掛られ候處に李如松鼓を鳴し旌旗を進て粟屋四郎兵衛備へ打て掛る氏春一手の者共此場所を一足にて退くまし各一同に戦死すへしと申合折敷鎧を膝の上に乗せ待掛候氏春も采配を取て各にむかひ日本より數千里山海を越て爰に至り大明の猛兵と合戦に及ぶ事武士の大望不過之一人にてても戦死を通るゝ道な

し各堅固に討死て有名を後代に残されよと下知する扱明兵の掛り來る様子は四郎兵衛備の右の方より馬上二百騎計掛て弓鐵砲をはたくと打掛射掛て左へ廻る其わとより又右の如く掛り來る事幾廻りも別手の騎馬かゝつて畢竟四郎兵衛備とひしと喰合候に付四郎兵衛一手の衆鎧を以て打敷ながら突伏候へは其鎧を引取る間もなくいやか上に重り來てつとひければ突こども切こども不成押立られて氏春三千の備引退く二陣の井上五郎兵衛は少し小高き丸山の上に居て待掛る四郎兵衛是を見て馬を乗上て一所に居る此時一所に居候七人は井上五郎兵衛粟屋四郎兵衛村上掃部助村上八郎左衛門益田七内年十五也後河内木梨平左衛門佐世勘兵衛七人なり然は五郎兵衛采配を取て一手の衆を下知するに各よく聞かれよ武士たる者は進て死するを榮花とす退て生るを子孫迄の耻辱とするなりと下

知して既に掛らんとする時佐世勘兵衛功者なれば五郎兵衛鎧の袖をひかへ唯今は地形悪敷候前の小川を越候時掛て一戦有へしと諫てひかへさせ待處に二三百騎計掛り來る敵の大將と見えたる武者鐵砲に中て馬上より落る一手の者共かゝりはせずしてふり返し是を見る此時勘兵衛時分よしと云言葉の下に五郎兵衛采配を振て掛る四郎兵衛一手ももり返し突て掛る敵の先勢ひとあて當られ崩れ大兵なるに依て二陣三陣つとひ來て既に五郎兵衛備も押崩さるへく見ゆる處に兼て被仰付候脇備衆鬨を揚て一時に掛て横を打明兵の備しとろに成て少し卻く隆景此様體を見たまひ采配を取せられ一萬の人數をいさめ無二無三にかゝり給ひ明の大兵を八町程突崩さるゝ時後陣の楊元多勢を卒し助け來る如松是に力を得て取て返し相戦ふ如松一手の侍大將李如柏李如梅李寧李有昇いつれも一命

を不惜馬上に劔を振て手つよく相働く此方の先衆李如松を目にかけ取かこみ打取へきとする時李有昇馬を乗よせ數人劔を以て突伏せ如松を救ふ然といへども鐵砲に中り馬より落て則死す明兵と相戦ふ事已の初刻より午に至る處に李如松落馬する井上五郎兵衛大將なりと察して馬を乗掛候處に明兵百計來て如松を取包み他の馬に乗せて逃る五郎兵衛如松を討洩し無念至極して齒切をする此時隆景の御旗本を初め宗茂秀包元康つゝへに乗て敵の多兵を突崩し給ふ爰に於て日本勢の二軍三軍一同に入萬餘の人數鬨を揚る浮田安心も秀家の御後見に罷成此方の人數は他にかまはず掛れとて采配を振て下知仕る黒田甲斐守加藤遠江守小西攝津守前野但馬守いつれも掛て相戦ふ吉川廣家は秀家と先を争ひ溝ども田ども不分大勢の真中へ掛り自身敵を馬上より突落し押て首を取指上らるゝ家

中の衆には香川又右衛門今田玄蕃松岡安右衛門二宮兵助桂左馬助前原備前境次郎右衛門長谷川源助いづれも首を取り致高名候綿貫藤次郎討死仕候なり浮田殿家來黒田殿家來にも高名の衆多く總軍関を揚て一手々々掛るに付明の大兵もろく崩れて敗軍し立山を越て逃る關城の大河へ逃掛り船を争ひ溺死する者其數を不知日本の諸將追討に打取れとて下知せられけれ共隆景御遠慮深き大將なれば制して追せられず日も暮に及び候へは日本勢も都へ打入明の大兵も恐るゝに不足と聲々に申され候敵を打取其數三萬餘級なり文祿二年正月廿六日江陽合戦とは是なり

付小早川隆景立花宗茂へ御感書被下事

並井上五郎兵衛栗屋四郎兵衛手柄詮議之事

一江陽合戦の次第三奉行衆より名護屋へ委細に被申上候へは秀吉公

被聞召大明日本初ての合戦に得勝利候儀御本望なりとの御意にて中々御機嫌能隆景並に一手の衆就中宗茂勳御感悦に被思召候とて則ち小早川殿立花殿へ御念の入たる御感書を被下候なり次に栗屋四郎兵衛井上五郎兵衛手柄の甲乙御詮議被成可被仰出と隆景被思召候處に四郎兵衛申は我等事大明の勢に押立られ候儀は不及力事なり其故は目に餘る程の大兵押來り突とも切とも不用彌か上に重り來て終に押崩れたり然れども頓てもり返し五郎兵衛同前に掛て明兵を突崩し候へは一つ場にて兩度合戦仕たるは我等なりさるに依て此度の手柄は我等一番なりと云五郎兵衛申は其方事敵の猛勢に押崩され敗軍仕る處に我等備にて請留明の大軍を突崩すなれば我に越たる手柄は有ましと云て及相論四郎兵衛五郎兵衛は近き一族なれども戦場の働甲乙の穿鑿なれば互に曾て不申止候に付隆景

□は文
字不明

も御詮議被成苦敷被思召御歸朝の時名護屋にて井上伯耆守を被召
寄兩人の申分様子承り吟味仕可申上旨御意被成候伯耆守御意承り
兩人申様得と致吟味相功名たるへき通申上に付御感状同し御文體
に被遊御腰物も同し位なると一時に被召出被下候兩人へ御銚子二
つ出御盃被遣御禮申上相濟申候五郎兵衛は伯耆守嫡子にて候四郎
兵衛は伯耆守□也

安南府城責之事

一都川より三里計川下に安南府と云ふ所あり都に在陣の日本勢兵糧
を置候藏本なり川の向に山あり此山に明兵取出の城を築き石垣を
高くし柵をふり人數二三萬計楯籠り帝都への往來を妨候此山は後
ろは嶮難なり二方は沼なり南には大河有之西は山遮て關城への通
路あり然處に三奉行申渡此取出の城責取可申候江陽の合戦に手に

合被申候衆は後陣たるへし手に合不申各責取可申との事にて一番
加藤遠江守光泰息左近正前野但馬守二番小西攝津守三番は石田治
部少増田右衛門尉大谷刑部少四番は浮田秀家五番中國勢と備を定
め押掛山の岑より見るに城中煙不立人影一圓無之候寄手衆不審に
存られ一備より馬乗十騎宛遣し見せらるゝ處に人聲彌無之に付物
見の者共柵際迄乘廻り能見て歸り城兵は聞逃仕たるものにて可有
之と申に付我先にと押寄せ柵を破り申處に其時城兵一時に立發り
石を轉しかけ半弓を以て雨の如く射立候へは寄手数數十人矢に中り
石にうたれて死す尤手負は數多有之加藤遠江守増田右衛門尉等責
あくみ少し引退く跡勢より引な退など伺りければ加藤取て返し人
數を折敷かせ的に成て射られしなり四番五番の寄手も先つかへ申
に付掛ること不成候吉川廣家は五番の後備なれども先手の様子手

ぬるく被存城の右の方に山の尾崎少しなれたる所を三之丸の如く構へたる所あり是を目にかけ手勢五千餘人を卒し彼尾崎の丸へ掛らるゝに沼田なれば氷を踏分て押よせ柵逆茂木も切破り乗込時城兵半弓を射出すこと雨霰の降る如し然共各甲をかたむけ無二無三に乘破りければ城兵は二之丸へ引退く續て二之丸へ責込候時城兵石を以て數人打殺し半弓を透間なく射出に付吉川殿衆一先三之曲輪へ引退く廣家采配を振て二之丸を乗取れど下知し給ふに付各是に競て石垣に取登り百人計二之丸へ乗込是を見て跡より續て三百人計乗込候廣家も御自身二之丸へ御乗候時矢石雨の如くなれば土手の陰に手廻の衆を伏させて見合たまふ時今田馬の鞭を手にかけて土手の上に立てへたりて射らるへきより掛りて射られよといへは廣家聞給ひ其儘手廻の者共にかゝれど下知し給ひ御自身にも

土手を越たまふ處に筒矢にて廣家の額を横矢に射る廣家とちくと被成候を周布吉藏家來内田九郎右衛門と申者引立肩に懸て土手の陰へ行廣家御下知に手負たれ共成程淺手なり早速に二之丸を責取候へと被仰付候處へ奉行衆より使を以て被申候は大手の寄手も引取候間早々人數を揚られ候へどの儀に付吉川殿も不及力三之丸の山下へ引取申候其刻周布吉藏岡田五郎右衛門尾川半右衛門各三人は跡に残り殿可仕の通を廣家被仰付候故引残り殿仕候城兵出て付送り申候へ共追拂ひ能凌き退申候廣家は是を感じたまふなり岡田は友田二郎兵衛兄にて候尾川は雲州衆なり又吉川勢の先備吉川勘左衛門事總勢は引退申候へ共曾て退不申二之丸にこたへ罷居候各申様に皆引取被申候間退候へと申候へ共大將の下知を不聞して退く法はなしとて罷居候に付廣家被聞召使を以て早々引取可申之旨

御下知候そにて退申候右三人の者共は勘左衛門に御意之旨申候て引さかり殿仕候二之丸にて高名仕候は松岡安左衛門祖式九右衛門森脇市郎右衛門也今日敵の首を取候者諸手に一人も無之候右四人の者計にて候吉川勢手負死人三百六十人有之廣家御馬印の吹貫に筒矢十七射立申候中々烈き寄場にて御座候に付廣家も御手を負れ候扱諸勢山の麓へ退候時浮田秀家久留米秀包吉川廣家より以使者奉行衆へ被申候は當城の儀御乗取可然存候御返事次第取て返し乗崩し可申と被申候へ共諸卒勞れ候に付引取明日責取可申との返答に付無是非退申候翌日隆景清正行長談合に城の様體能見せ候て一刻責に可乗取との事にて見せられ候處に夜中に城兵關城へ落退一人も居不申候此段隆景被聞召昨日外構を乗取候刻城中の弱兵皆欠落して南の大河に溺れて大半死すると云なれば先手衆再ひ急に

攻るに於ては必定可攻崩候殘多き事なり此城を乗取ならば李如松も關城に在陣なるまし扱々惜き事なりと被仰候此安南府を日本勢は河下の城共蘆原の城共申候也如件

晋州落城之事

一文祿二の三月晋州の寄手衆敗軍の儀秀吉公被聞召大に御立腹にて早速此城を攻崩し一人も不殘切捨大將牧司の首を可指越可有御實檢之旨黒田如水淺野彈正に被仰渡候兩人急き爲御使朝鮮へ致渡海申渡に付則各談合にて攻道具を拵へ同年六月廿四日晋州へ押寄候東の方大手の大將は浮田秀家なり先手は加藤清正小西行長其外秀家一手には黒田長政淺野幸長島津義弘鍋島直茂長曾我部元親蜂須賀家政立花宗茂此外數多相備衆有之西の方搦手の大將は毛利秀元公なり御相備は小早川隆景伊達正宗黒田如水淺野彈正吉川廣家共

戸元續中國勢不殘御手に屬し候大手搦手都合人數六萬餘人翌日より仕寄を付攻道具を以て稠敷攻候へ共朝鮮第一の名城と云其上牧司事謀ある武將なれば城中靜まりて少も不騒矢倉よりは石を投げ楯の板を打碎きたよふ所を半弓鐵砲にて射拂ひ壁下へ付候へは火矢を射かけ續松に火を付て投かけ砂をいりてすくひかくるに付寄手も攻あくみ候處に清正工夫にて龜の甲と名をつけて乗物の様なる物を拵へ足には車を付上をは牛の生皮にて厚く張て鐵手子を以て押よせ候尤跡へも引戻し申様に細引を付たり此龜の甲三つ拵へそろくと押寄せて門の脇なる石垣の角石二つ三つ刎ければ石垣二三間忽ち崩れ候是より乘込に付即時大手を乗取西の方秀元御一手の衆も急に乘込城兵を討取に付同月廿九日午ノ刻落城仕る浮田殿一手へ打取首數六千餘級なり秀元御一手へは八千餘討取候川

手に被置候浮田河内守三百餘打取吉川廣家の御家來へ首數六百餘總合一萬五千餘の首數なり城の後は嶮岨なる山なれば巖上より僵れ落河水に溺れて死する者數不知爰に周布孫右衛門尉元盛請手に罷居候處に敵三百人計河の中の洲に集り居候を見て甲をは卸して持せ置小姓二人水練達者なる者を召連立およきに仕り件の敵中へ切込主從三人にて敵數十人切伏せ申候へ共敵共數人組付て水中へ引込上下三人共に討死仕候元盛廿六歳の時なり男子無之に付弟吉藏に家續被仰付候扱又大將牧司は疵を蒙り藪の中に隠れ居候を浮田殿家來岡本權之丞と申者首を取候て生捕の者に見せ候へは牧司首無紛と申に付差出候處に大將の首なるに付秀家大に感せられ則ち鹽に漬日本へ渡され候へは秀吉公御實檢被遊大路を渡され候此度の戦功加藤清正黒田長政小西行長同前に候へ共清正は工夫を以

て龜の甲を作り城の石垣を崩さるゝに付早く落城候故清正を以て第一の功とさせられ候伊達正宗は小人数にて渡海致され軍忠を竭され候に付秀吉公感したまふなり毛利秀元は請手たりと雖も急に攻入首數大手より勝れ候故被感之右の衆中へ御感書を被下候なり此晋州の城は名城たるに付李昭都を落らるゝ時箕子以來代々の重器を被籠置候處に此度悉く焼失申候事

吉川廣家大虎献上之事

一晋州落城以後も彌和平の取扱に付諸將も隙にて被居候狩など申付慰み被申候廣家にも虎狩被仰付候處に長一丈餘の大虎取申に付各へ御見せ候へは勝れたる大虎にて候間被差上可然との儀にて名護屋へ御献上被成候へは秀吉公御一覽遊はされ希代のけたものなりと御意にて家康公前田利家へ御見せ被成其後大名衆へ見物被仰付

候御機嫌不大形廣家へ御内書被成下候又廣家の足輕虎狩に罷出山の
大岩の陰に鐵砲をかまへ居申候所に岩のあなたへ豹一匹参り候て
彼者の匂ひをかき候て岩を飛越へ喰掛り申候鐵砲にて打申儀は
不相成候に付ひしと組候て谷へ落申候内に脇差にて突殺し申候廣
家御感被成則ち虎のわけと名字を被下侍に被仰付小知を被遣候な
り又加藤清正の足輕陣屋によく寢候て居申處へ虎來り則ちくわへ
山へ歸り申候脇差も無之に付無念に存し居申候計にて候處に山の
峯へくわへ候て参り手玉に取り遊ひ申候内朝日さし申候へは虎と
くと寢申候此足輕心に存し候は日本を罷出候より生て可歸とは不
存候へ共虎の餌になるへきとは思ひもよらすと涙を流し候内に虎
の腹脇の下などをかきてやり候へは中々手足を伸へ嬉しかり申候
脇を見候へは藤かつら松にまとい有之候に付此かつらを喰切り一

方の端をぬちやわらけ候て虎のきんのあたりをかきさすり候へは
一入よく寝申に付藤かつらにてきんをくゝり一方をは松によく結
付候てそろくゝと這退申候處に虎目をさまし追かけ喰留可申と存
候て飛申に付件のかつらにてきんを締め候故則ち目をまはし死申
候足輕は陣屋へ歸り傍輩共同道仕り山へまいり見申候へは何所も
無之死申に付虎を取候て罷歸候清正被聞付褒美不大形是もきん玉
と申名字を付られ取立侍になし被申候又鍋島殿陣場へ虎一匹まい
り候左右前後の陣屋より侍共手道具を取て取巻申候へ共誰も一番
に虎に仕掛申者無之内に取巻候て居候者の上を飛越逃申候後に飛
申候所の間を打候て見候へは一飛に十七間飛申の由候事

大和大納言殿姫君毛利秀元へ御婚禮之事

一文祿三年の秋秀元御縁組の儀可被仰付候間御人數の儀は元清に御

預け候て釜山浦に被爲置可有御歸朝之旨秀吉公御意に付同年九月
に御歸朝候處に大和大納言殿姫君秀吉公御養君に被遊可被遣之通
被仰渡候翌年正月に被召出晋州に於て諸手にすくれ秀元御一手へ
首數打取候爲忠賞宰相に被仰付之旨被仰出御官位御昇進被遊候御
位階の儀正三位と記したる舊記も有之追て可記之其後同年に御婚
禮相調候御輿の役藤堂佐渡守羽田長門守兩人なり請取手は毛利大
藏大輔渡邊飛騨守なり長柄の輿御召替共に十三挺あしろの輿三十
六挺乗物二百十六挺御供の侍いづれも諸大夫にて候秀吉公も御女
中方御同道にて戸田民部少屋敷へ御下り被成御棧敷にて被遊御見
物候都鄙の貴賤ちまたにつとひ平伏して見物仕候此時秀元御歳十
六歳なり姫君御歳七歳にならせられ候唯今迄御婚禮に箇様なるは
京田舎共に無之と沙汰仕候然共御不幸にて慶長十四年御歳二十二

にて御子様も無御座御逝去なされ其後家康公上意にて松平因幡守
康元御息女御縁組被仰出御婚禮相調申候事

輝元公へ淀川筋土手普請被仰付候事

一文祿三年九月に御縁組の儀に付秀元に歸朝被仰付候就夫輝元公へ
朝鮮御渡海可被成之旨被仰出候に付翌四年の春壹岐の島迄御渡海
被遊候へ共大明の和平彌相調ひ朝鮮在陣の諸大名歸朝被仕に付壹
岐の島より御歸被遊候處に攝津河内の川土手の普請被仰付御馳走
可被成旨被仰出候に付御人數被召上土手普請被仰付候山崎より大
坂天滿橋迄一筋鳥羽より京橋迄一筋天の川左右より河内の五ヶ三
ヶ大和川の左右極樂橋迄一筋なり輝元公御普請爲御見合節々御出
被成候に付御茶屋被仰付候處に秀吉公御茶屋へ可被成御成之旨御
内意候に付彌御茶屋結構に被仰付候へは被成御下候御馳走様々の

儀共不被申盡候御機嫌能御膳被召上其上にて御囃子御座候輝元公
熊野の小鼓被遊候左候て新身國行御腰物清水藤四郎御脇差被差上
候處に成程御機嫌能御兩腰を御差被成候て日本の儀は不及仰異國
迄思召儘に被仰付候との御意にて御自慢被遊御茶など被召上候て
緩々と御咄被成還御候事

關白秀次公より上使之事

一文祿四年五月關白秀次公より白江備後守爲上使大阪御屋敷被差越
輝元公へ御意被成候は此以後被對關白殿下無御別心可有御馳走と
の御誓紙被差上候は、可爲御滿悦と上意候就夫御座被成合候御一
門御家老中被召出候ていか様に御請被仰上可然候する哉と御談合
候處に林肥前守申上候は此儀は以來如何様の儀可有御座も知れ不
申候大事の儀共に奉存候左様候とても御誓紙難被爲成候とも御請

いかゝに奉存候大閣様御同前に御馳走可被遊と御文體に被遊可然哉と申上候へは輝元公可然被思召御一門御家老衆も一同に尤の申上様と被仰其通に御文體被遊御誓紙被差上候肥前守は重意有之者にて候由申傳候又或年輝元公御代に雲州兩國造總領をあらそひ公事に仕輝元公へ雙方より書付を差上候御内證にて御詮議被遊候へ共御了簡難被遊候に付いかゝ可被仰付哉と御談合の時又肥前守申上候は如御意往古の儀は武家と御座候ても御沙汰なり兼可申候まして神職の家の儀に候へは分り兼可申候第一國主は替りものにて候間隨分御吟味被遊候て雙方異儀無之様にと被仰付候共御領國の間は別儀御座有間敷候國主替り申候時は又公事可有御座候其節誰人にてても御沙汰被遊候て被爲置候様に可被申付儀は不知事に候へは却て批判に御逢被成候御儀も可有御座候所詮闖取に被仰付神慮

に被任可然哉と申上候へは無餘儀被思召右之通に被仰付候然處に堀尾山城守殿御領國に成候て又公事再發仕兩社より書付を差出候へ共輝元闖取に被申付神慮に任せられ候へは今以不及沙汰候とて輝元公被仰付通に被申付の由に候事

於禁中御能之事

一慶長元年秀頼初て御參内被成に付爲御祝翌日於禁裡御能御座候秀吉公御能被遊候家康公は大黒の狂言被遊輝元公は三番目芭蕉の小鼓被遊候事

日本勢朝鮮再渡之事

一大明日本の和義不調又朝鮮へ御人數被差渡候慶長二年正月元日被差出二月に御人數付備定城番の衆御書付被差出候此度は秀元公御人數被召連可有御渡海旨に候此時の御朱印二月廿一日羽柴安藝宰

相とのへと當る同年四月下旬伏見御出足候て三原へ御立寄被成隆景へ御暇乞被成候刻隆景秀元へ以來迄の御異見など被遊の由に候左候て御領國中の總勢被召連同年五月廿八日廣嶋御出船候て朝鮮御渡海被成候小西行長は秀吉公御前惡敷なり候に付何とそ此後遂軍忠御機嫌に應し候様に仕度存に付正月十四日肥後を出馬仕渡海致し候就夫加藤清正も同十五日出馬にて出船候兩人共に釜山浦へ著岸にて城の普請兵糧たくはへ長陣の支度被仕候其内に日本勢悉く六月上旬には釜山浦又は竹嶋へ著仕候然處に沉惟敬方より婁國安と申者を行长陣所へ使に差越申候は我等事日本へ志を通し候儀顯れいましめられ罷居候され共我等志に日本にある南原の城は楊元また全羅道の節度使李福男此兩將城主たり城中人數不少候貴所諸將御談合候て御攻候は、必ず落城可仕候南原は東に雲峯鳥嶺あ

り南に三浪大江あり道金海竹嶋に通し候於朝鮮要害の地なり右に閑山嶋あり邢玠遼兵三千を以て守らせ候陳恩忠二千の人數を以て金州にあり朝鮮の將金應瑞李元翼雲峯にあり權標元均閑山島の邊に居候皆南原の援兵なり右の所々に押への兵を置攻取給は、子細ある間敷と告候行长悦ひ各と談合して急に南原を攻へきと促し候へ共七月初より大雨にて日數を経候に付て及延引候然處に朝鮮の武將元均明兵の水軍をかたらひ洪水にて陸の戰不成候に付軍船を催し釜山浦へ寄候由敵方より告候者有之に付此方より藤堂佐渡守菅平右衛門其外船手衆を被差向候敵兵案外逆寄に逢候に付皆退散仕候就夫此方の衆光陽豆耻津に至て亂入仕る南原の近所なるに依て浮田秀家一手小西攝津守先手にて島津兵庫頭蜂須賀阿波守長會我部土佐守加藤左馬助生駒讚岐守其外總勢五萬にて慶州を右に見

雲峯鳥嶺を押へ南原にむかふ秀元御一手には加藤主計頭先手にて黒田甲斐守淺野左京大夫毛利壹岐守吉川廣家宍戸備前守其外中國勢都合六萬人慶州を發し靈陽大丘を過て金義館に打入都に在陣仕り明の大兵を押へ候様子により合戦せらるへき爲めなり秀秋よりも山口玄蕃伊藤雅樂助南部武右衛門を大將として八千の軍士を被差出候此者共忠清道に發向仕る雲峯に陣取居候敵不及一戰落候島津兵庫頭加藤左馬助兩人は闇取に取當り金州にむかひ是を押へ候諸方の押へ等首尾仕候に付同年八月十三日秀家一手三萬餘南原へ押寄急に攻申候城兵も手強く防ぎ申候晝夜三日荒手を入替攻候へ共城兵稠敷相働味方に手負死人數多御座候に付小西行長工夫にて攻口をくつろけ遠攻に仕候様體見せ候へは城兵も晝夜共に三日の間休息不仕防ぎ申に付草臥候て十六日の夜は前後も不辨寐申候小

西事城の様體見計ひ十七日未明に手勢はかり召連城の南門に忍ひ寄急に門の扉を打破り責込候諸手より是を見て我意地増に駈付責込候に付南原忽ち落城仕る大將楊元は帳中よりはたかにて逃出死を遁れ候李福男は戦死仕候諸手へ討取首數三千餘級生捕數百人有之慶長二年八月十七日落城なり小西行長大に名を得申候扱又秀元御一手は全義館に著陣有て人馬を休め夫より都近邊御働被成候九月廿五日にせぐちうと申所に御陣取候翌廿六日早天に稷山水源と云所へ敵出る都不遠候に付日本勢直に王城へ可働と存し副總兵解生と申者爲可防戰朝鮮の兵五百計を先に立解生人數を卒て罷出候黒田殿先手栗山備後守後藤又兵衛五十騎にて突てかゝり相戦ふ處に楊登山午伯英と云兩將解生に加勢して押來るされとも後藤栗山少しも不恐大兵と相戦ひ圍を破りて出る秀元御本陣には栗屋四郎

兵衛井上五郎兵衛裳上など云功者數多居申に付敵の様子を見候て敵大勢にて御座候跡よりいか程來るへきも知れ不申候聊爾の御働御無用に存し候とて御陣山に柵をふり段々に御人數を備へられ候左候處に黒田甲斐守との後藤栗山敵の圍を破り出るを見られ旗本二千の人數にて懸らるゝ此方の御先手宍戸備前守と無二に突て懸らるゝ解生人數裏崩れ仕逃申候處に李益喬劉遇節と申兩將助け來る解生是に力を得て返し相戦ふ黒田永正宍戸元續急に突て懸り敵の大兵を切崩さるゝ宍戸殿家來中所源七郎諸人に勝れ高名仕候黒井三郎兵衛渡邊河内も手柄仕候尤討死手負數多有之備前守下知に馬上の者は馬にて敵を乗倒し歩行者に首を取せ候へと被申付候故深瀬二郎兵衛は敵數人馬にて乗倒し首を取らせ候敵騎馬四十騎計二むらかりに成て退申候真中へ二郎兵衛乗掛組打の高名仕候其

身も數箇所手負申候此段を熊谷豊前守天野五郎七能見届け秀元御前にて宜しく被申上打取候首御實檢被遊御感被成候井上五郎兵衛栗屋四郎兵衛御前に罷居取合被申上候此合戦に吉見長次郎殿はれなる高名被仕候終に敵不相叶退散仕候日も晩に及候に付味方長追不仕各打入被申候此御方へ討取候首數二百餘有之黒田殿一手へも首數取被申候其後十月十日頃全羅道の内せんしゆと申所にて浮田殿一手此方御一手一所に御陣取候て御談合に追日寒氣強く成候間先つ釜山浦近所へ御打入可被成とて道筋を替先つ浮田殿御一手引被申候其次に秀元御一手も傳に居被申候城主被召連釜山浦近所やくさんへ御打納候淺野左京大夫殿宍戸備前守殿兩人殿より此度の御陣中七十日に及び御陣替候長雨にて具足くさり皮にてとち申所よりうじ出申候中々諸勢難儀仕候事

星州城被明退事

一星州と申城には小早川秀包筑紫上野介兩人籠り被居候處に大明の武將麻貴李如梅兩人人數を卒し寄來り候大勢に被取圍候ては難防可有之候とて小早川隆景御家來衆籠り居候谷の城迄先つ可引退と御談合候處に谷の城より人數二千迎ひに參り候に付秀秋御家來南部武右衛門など被仰談一同に御引退候其内に谷の城も早速に明退候へは李如梅城へ入替り罷居候此方の御人數谷の城へ參候處に案外敵兵罷居人數を出し候へ共秀包御下知を以て筑紫上野介南部武右衛門などよく働き無御別條御退陣候事

蔚山之事

一秀元やくさんへ御馬を納られ諸將御談合の上蔚山に城を築き加藤清正被居可然との儀にて急に繩張等清正被仕候て普請御座候奉行

は大田飛驒守なり淺野左京大夫殿も普請見合被仕候此御方よりは宍戸備前守を大頭に被仰付吉見殿其外歴々の衆被差出都合一萬の御人數被遣候十月中旬より普請初り十二月初には大形相調申候備前守請取の町場は頓に成就仕候に付町場を渡し可申候御請取候様にと度々被申候へ共清正何と被存候哉請取不被申に付日々々と滞留候て居被申候然處に十二月廿一日の夜七ツ時大明の大勢蔚山へ取掛候城普請も成就不仕候に付清正家來加藤清兵衛を先として中國衆も大形城外に陣屋を懸居申候一番に淺口陣屋を打破り申候淺口事取物取あへす退申候に付無別條城へ籠り申候冷泉民部大輔阿曾沼豊後守都野三左衛門などは可防と存し働き申に付三人共に討死仕候蔚山の儀松井物語に委細書記し申に付爰には其殘計を記し申候明れば廿一日の早天に李如梅楊登山兩人大兵を卒し責寄る

遊軍擺賽五百騎にて城の壁下に付て責上る城中の者共鐵砲を以て先掛の敵を大形打殺申候故敵軍少し責あくひ色を見て城兵一萬人切先を揃て切て出擺賽手勢を追拂ひ候此時敵大勢を以て城兵を取包み候へ共各身命を捨て戦ひ敵を追崩し速に城中へ入候味方打死四百人有之敵を討取其數三千餘人なり清正は西生浦へ參られ機張と云所に被居候淺野左京大夫宍戸備前守大田飛騨守は彦陽と蔚山の間日本道三里有之三人の衆彦陽を出て蔚山へ參られ候處に高策吳惟忠と申兩大將取圍み申候三人共に大勢のかこみを切抜て蔚山近所迄被參候處に幸長疵を被蒙既に討死に極り候時幸長家老龜田大隅と申者明兵一手の大將を打取候に付敵軍亂て不得働候此折柄城より加藤清兵衛人數召連迎に出候故難なく左京大夫殿飛騨守城へ入被申候宍戸元續は敵に隔てられ一同に城へ入被申儀不相成協

道より漸く夜に入城へ籠り被申候扱加藤清兵衛各へ談合申候は清正趣を注進仕度候使には誰を遣し可申哉と問申候時幸長家來木村頼母と申者罷出拙者御使に可參と申に付幸長被聞候てさらは其方を可遣と被申書狀認め渡し被申候へは早速頼母機張へ行書狀差出口上委細に申ければ清正書狀披見し趣を被聞片時もはやく歸城仕度事なり早々櫓敷の船支度可仕と被申付候家老共うけ給り御歸城御急き被成候事御尤千萬には奉存候へ共漢南の大兵の圍を破り蔚山へ御入城難計存候御味方中へ被仰達御人數を被催蔚山を御救ひ可然と申候へは清正申され候は各申處無餘儀候乍去我等日本を出候刻淺野彈正暇乞の時息左京大夫を頼む由被申候に付若急難有之時は助力可申と堅約仕候幸長を見捨殺しては我等再ひ彈正に逢候事成間敷候我蔚山へ著不申内幸長討死せば我等も討死して彈正と

生來の約束を冥途にて報すへし第二には蔚山は我等抱の居城なり
此一左右を聞なから敵の多勢に恐れ遠方の味方を招き待居候内に
落城せば清正耻辱は一命よりも重かるへし敵勢幾萬ありとも二つ
に突破り城中へ入るへき大道は諸士の心中に有とて人數五百人小
船十艘に乗せて機張を出船せられ候へ共清正の勇氣聞及ひ候に付
敵一圓さへきりとめす無異儀歸城被申候城中の諸勢さふひ出申
候且又廿二日の夜敵兵新寄の時穴戸殿家來共罷居申候處へ清正の
家中加藤與左衛門方より鉾田傳右衛門と申者を使にて申越候は爰
許にて討死仕候ても知る者も有間敷候條早々城へ籠り討死可仕の
由口上に候深瀬二郎兵衛末兼土佐守承り尤に存候通返詞仕兩人組
共に城へ籠り申候翌朝城兵打て出合戦御座候時も兩組罷出五六度
に及懸引合戦仕候淺原備後渡邊壹岐難波信濃いつれも組の鐵砲召

連罷出敵を射立よく働き中候夜中城へ籠り候時の退口朝合戦兩度
に討死仕候者は江田市兵衛同彌六藏田三爲山路惣太郎井上又六兒
玉五兵衛萬代彦右衛門大垣左吉若林新太郎木口仁右衛門板花利兵
衛以上十一人なり卯ノ刻より巳ノ刻迄防戦御座候檜崎吉右衛門江
田忠次郎兩人は數箇所手を負申候へ共命無別條候又廿三日に大勢
責寄淺野左京大夫殿持口西の門押破り責込候三之丸に居申候者共
も敵にせき崩され候深瀬二郎兵衛は備前守被申付候持口に罷居候
故はつし不申候て壁の手にこたへ候檜崎吉右衛門渡邊三右衛門も
一所に罷居候然共味方衆一人も居不申に付敵の中を切抜候てやう
く本丸東の門迄取上り候處に此門に大田飛驒守殿被居候公儀御
目附にて候故二郎兵衛を見知被申長刀をさし出し是へと被申候に
付門に入可申と仕候へは敵付入に責込候に付返し合せ數人に手を

付追拂門へ入申候飛驒守殿眼前の働きに候故後日に御沙汰にて御感に候神代新三郎は此時討死仕候本丸にて黒井三郎兵衛に二郎兵衛逢候て備前守殿を尋候へ共存不申に付後の埋門へ参り候て見申候へは此門へも敵責入候を三村紀伊守宍戸殿家來末兼土佐鍵二本にて突拂ひ候折節備前守も此門へ被参候其後敵悉く引退き候故大將衆御談合に本丸は主計頭殿左京大夫殿大田飛驒守殿二之丸には宍戸備前守殿三之丸には元續一手の被居候筈に相定り候され共三之丸普請成就不仕に付何も参り不被申候主計殿よりは使にて三之丸は大事の敵よせにて候被明候儀如何様の事にて候哉と節々被申越候に付備前守直に各へ被申候は何とて三之丸へ不被参候哉此城落去候時は本丸二三之丸共に一同につふれ可申候御忘却不及是非候於今は各を二之丸に置候我等三之丸へ可参候口羽十郎兵衛和智勝

兵などは殿様御厚恩不淺候箇様の時人先に御用に御立候て御重恩報謝可被申儀に候手前親類にて候へは人の存る所又申す所を兼て我等存寄を申候との事に候へは兩人此詞に驚き即時三之丸へ参り候日野上總介備前殿組にて別て被申談候に付て續て三之丸へ被参候其後熊谷平賀三刀屋天野五郎右衛門三好などいづれも被参三之丸取堅め被申候口羽十郎兵衛は三之丸門を堅められ候扉無之に付船の楫を數多取寄かき付堅固に被仕候隣は日野和知兩人にて候成程精を出し被申候吉見長次郎殿家頼吉見四兵衛と申者参り候て長次郎儀唯今三之丸へ籠り申候小人数にては候へ共堅固に寄り可申の通付届罷歸り候又廿四日の夜備前守殿家來を夜討に出し被申候達者なる者を五百人渡邊壹岐難波信濃兩人手頭にて罷出敵陣へ忍ひ入數百人切捨に仕候味方には手負死人一人も無之得勝利罷歸り

候又或時清正元續を招き被申談候は御存の通兵糧一圓無之候普請も不調候へは當城持詰候儀成間敷候哉此城落去候は、二夕たひ合戦仕返し候事むつかしく候日本負になり候間何とぞ切抜候て西生浦へ行き候は、兵糧玉藥丈夫に候間永籠城可仕候左候時は大明勢退屈仕り敗軍可申候いか、被存候哉と被申候備前守承り仰の様に唐日本の弓矢爰に極り候一大事此時に候何分にも御思惟には過申間敷候乍去總人數飢渴に及ひ候の條西生浦迄九里の道を切抜候儀なる間敷候雜兵共に二萬の人數當城又は西生浦の間にて大かた討死可仕候敵は追討に大勢打取其餘勢を以て取掛申候は、西生浦にての御利運も不定に存候と被申候へは主計頭も尤と被存其儀止られ候其後敵の總大將楊鎬陣所へ使者を以て被申候は日本の武將清正と大明の大將楊鎬相戦事數日なり唯群兵の罪なくして死すへき

事を憐み思ふなり是故に吾楊鎬に對面し誓約して兵を我朝に返すへしと申されければ楊鎬聞て大に悦ひ清正事勢ひ盡て降參を乞ふされども我曾て赦すまじ搦め取て帝王に可獻とて即ち領掌の返答仕り其所其期を定め既に其日に當つて楊鎬其所に来て清正を招く事再三なり清正も銀の甲を著し鎧を著て可打出支度被仕候處に淺野左京大夫參られ異見被仕候は敵の心知り難し若力者を以て御自分を生捕ならば諸人如何程無念に存し戦死するとも益あるまじされ共其楊鎬との約諾違變難成こと有之免角出會於被申は名代に我等參るへし御自分を見知たる者敵方に一人も有間敷候と達て被申候清正家來は不及申毛利家の諸將就中宍戸備前守一同に幸長を感じ清正を止め申候に付清正も尤と存せられ楊鎬方へ使を以て今日は罷出候儀不相成と被申候へは楊鎬大に立腹仕り急に責取候へと

下知候へども寒氣甚敷候に付諸軍勢請合不申候なり然處に先年清正家中に居申候岡本越後と申者又浮田殿に居申候田原七左衛門と申者兩人近年大明へ参り罷り居候此者兩人廿七日の朝城近くまいり矢留を乞候て申候は我等共兩人は日本の者にて候へは今以日本の事疎意不存候免角御和談可然存畢竟城はかゝはり申間敷と扱ひ申候清正聞れ候て矢種の便りにて候間先扱ひを切さす面白く操候て取延られ候へと備前守方へ被申に付色々に申候て延引させ被申候就夫廿七日より廿九日迄は籠城の諸人くつろき申候廿九日に扱ひをさらし申に付晦日より正月二日迄稠敷責申候處に毛利秀元御一手黒田甲斐守鍋島直茂秀元御旗本どもに御人數三萬人四國衆人數二萬小早川秀秋より山口玄蕃を大將にて人數一萬人小西行長手勢三千都合六萬餘正月二日三日の間に蔚山後詰として著陣候て蔚

山の川向ひの山に陣取旗旗をなひかし候秀元御陣所へ各集り被申明日は川を渡し御一戦と被相定候一番黒田甲斐守蜂須賀阿波守二番鍋島信濃守山口玄蕃三は秀元御旗本と御備定相極り候吉川廣家は御陣所遠方にて各一同に著陣成せられす御遅参候故黒田殿御陣所へ御出候へは甲州相對被仕貴所御陣所よりは何と御急き候ども只今あとは御著陣成間敷處に不思議に存候明且戦と相定り候と被申候へは扱は各御談合の上明日御合戦に御議定候哉心得申候と被仰御歸り候て家來衆被召集明日一戦と相極り候試に只今川を渡し敵を偽り引見可申と被仰其儘馬に乗り川へ乗付られ候故家來衆一同に川を渡し候敵此様體を見候て騒ぎ立黄なる印を持せたる敵一備出向ひ候廣家自身突て懸り給ひ馬上の敵を鍵にて突落し首を被取候今田玄蕃森脇作右衛門敵を打取り高名仕候黒田永正この様子

を見られ即ち川を渡し被申候總軍も山より打下し候體に候へ共日暮申に付敵も引退候此方にも人數を納られ候吉川殿働の様子御目附早川殿見られ候て此段委細に言上可仕と被申感られ候翌四日未明に敵悉く敗軍仕候籠城の衆は一圓不存候處に後詰の衆敵陣に人數見え不申に氣を付け敗軍と存し城中へ告申候就夫俄に城兵援兵共に敵陣へ押寄候へは吳惟忠茅國器兩將残り居殿を仕る此方の衆追掛五百餘首を取申候弓鐵砲其外兵器路頭に棄捐こと數不知候楊鎬事三國に汚名を顯し候なり又昨三日の日敵の大將の三箇所に大なる音聞えて烟り夥しく立申候を城中の衆見候て功者なる衆は敗軍にて可有之と申したる由に候鐵砲の藥を焼申すと考へての事なり籠城の諸人不慮に運を開き太慶仕候死人をかき捨掃除を仕り清正居城被仕候正月四日の晩後詰衆の陣所へ清正禮に被參候其時廣

家に被申候は昨日御自分御働さ故敵兵今日敗軍仕候とて感し被申候次てに御自分御馬印遠方よりは見えかね申候と物語せられ候廣家聞かれ家傳の印に候へ共ちいさく御座候御自分様馬蘭の臺を所望仕度候色を替可申と被仰候へは清正悦にて此度の御禮に進し可申とて出し被申候扱又清正宍戸備前守殿談合にて二月中旬には人數悉く釜山浦へ戻し被申候左候て備前守を同道にて清正西生浦へ參られ様々馳走の上此間の褒美として刀一腰出し被申候備前守も二日滞留仕釜山浦へ歸り被申候其後城番の衆計朝鮮在陣仕秀元秀家秀秋其外歸朝被仰付六月中旬には各伏見へ參勤候秀元御事御前被召出此度の御軍忠不淺殊に小西事順天可引退覺悟に候時清正致談合使を遣し申鎮め候段感し被思召之旨御意被成御仕合能御退出被遊候事如件

雜品

從隆景元清元康渡邊飛驒守へ御狀之寫

態申入候渡邊身體之事今之姿は難相續之由に候遙々此表被罷下候歎不及是非候如余仁之難指放筋目に候間先年以來之儀御兩所迄申入候條何と様にも重疊被遂御披露案堵候様に可被仰理候其子細は渡邊越中守事興元様被懸御目從備後被召下候て久敷吉田被召置候其節日頼様は多治比殿にて御座候つる間如兄弟興元様御取操候て滯留候其以後草出へ被罷歸候興元様も御知行候其より以來中國の變化大小家共に不知其數事に候然間吉田之御事いぬふし坂上備後口は伊多岐馬とをしを限りに御無力に罷成候條備後外部總並之身持をさせられ候右之御親を以吉田之儀わたおろかに不被存内證にては折々互に通達候て年月を被送候左候處

に尼子方至郡山被取懸既に敗軍候之條其節備後悉大内殿被任御存分神邊城主山名宮内少方備州外部を被召置候間總並に神邊被相領候其以後雲州を大内殿敗軍之時山名宮内少被構表裏富田城へ被走入候因茲敗軍之儀候間中國悉尼子一統候て只吉田計防州被相届候新庄出羽迄雲州同意候て既佐東伴小河内敵迄に候其時北口には口羽之城を被取出候て此間之下野守を被籠置たる御事に候簡程之儀に候條備後は悉沼田三原限りに罷成候間不及是非體候つる吉田蹈こたへさせられ候以威力次第に防州弓箭なをり以御武略備後外郡衆悉被引付神邊七年目に大内殿被召詰候其以來備後中郡をは日頼様御裁判被成候外郡は西條之守護に被差置候弘中三河守に付候て直に被得御意候然は中郡衆外郡衆半惡敷候故種々出入候て毛利弘中間惡敷罷成候間其節日頼様仰に

は外郡並之儀候間是非共弘中へ被付候へと越中守此間之出雲守
父子へ色々被成御理候へ共たどへ身上は失候共弘中方へは付申
間敷候由被申切候て日頼様山口へ爲御禮御下向候時は御一所と
候て渡邊安田兩人ならては備後安藝に御供仕者無之候つる然は
外郡衆に被隔何共迷惑之身體にて既山田之城へは於度々御番衆
被差籠吉田より被救置候左候處に五箇手代島拙者竹原に罷居候
時西口を正持山さはう被取誘候其時至鞆我等在陣候間渡邊被得
力候て令入魂て城跡に一丸相抱被抽忠義候終には神邊退屈候て
落去候無程義隆陶御引分に成備後安藝被捨置様に候て吉田之御
持分に罷成候彼仁被相續候越中守出雲守事誠日頼様常榮様被掛
御目候事不大形候元清には可有御覺候參上候時は在吉田被仕御
心安御局方御座之間迄も被召寄候て少身ながら御入魂之半に候

毛利殿御家來同前と申も中々疎なる御事に候年來被掛御目越中
守出雲守民部少四郎右衛門四代不相替御心安く日頼様常榮様御
伽にも被罷成候事淵底各御存之儀に候此節之御調も御家長久之
御建立に候へは數代御馳走忠節無別儀致され候御届之衆中於向
後も立御用可申候國安穩之卜と祐可被仰付之由關白様御内證之
大辻にて御座候處に各宰判之衆中或は無案内或は御分別不行届
下々依時にの申分に今之姿は被相濟御家長久立御用調も不相成
體はし〜及承日夜悔存候處に因島渡邊以下之爲體致仰天而已
候山田事幸元康御知行之内へ參之由に候間以御分別他給へ被仰
替山田一郷之事は渡邊に安堵させられ候て御先祖へ之御届當時
御忘却御心底をも被省可然存候條御兩所へ打當候て申入候此類
數多可有之様に可被思召候へ共備石之衆中に日頼様常榮様御兩

代迄無相違被相究候は二三人之外は數多御座有間敷候結句渡邊
事は興元様以來之御事に候條能々可被成御分別候當時は古事入
間敷様に被思召候へ共其段は不忠之仁當代之謀叛仁不及是非九
わけ者家を持崩仕候儀に候昔はとれも先代之忠義を以不被押被
相續候此段今風相替候事は無承儀候先忠數代無別儀仁體を無故
可及迷惑事去とては誰々之上にも有間敷儀に候如只今其段無正
儀成行候は、日頼末子と旁以御自慢候共末は無其曲可成行候是
は次手之申事に候御分別肝要に候此段紙面儘に
殿様被入御披露御申分肝要に候はや御上にて候は、御心安使一
人自御兩所能御登せ候て被仰達正月十日之内至名島御返事可被
仰聞事奉待候猶井彌兵に申合候恐々謹言

十二月十七日

隆景在判

元清

渡飛

元康

從武田大膳大夫勝頼公方義昭公へ言上書札之寫
從大坂如告來者依藝州之輝元忠志

公方様至備後國被移御座之由誠に勝頼太慶満足難盡筆紙候御入
洛御本意不可過當秋候隨て去歲以來節々以使者飛脚雖言上候或
於敵國亡失或半途歸參終に公邊不致參上之條併可被處勝頼□□
歟生涯之浮沉不可如之候無誤之通宜御取成頼入之外無他候然て
向大坂信長對城數箇所取立絶通路之由候一段窮屈候雖然去頃從
藝州以船艦大坂糧米合力剩信長家僕宗勇士船中取乘支海上防戰
候處に藝州之兵船無故押寄敵船悉擊碎兇徒數千餘討果之由吉事

簡要之儀共に候此鋒先片時早速 公方様令供奉輝元京表有出勢
御入洛之馳走願望候雖勝頼小身候至尾濃國中御手合毛髮不可有
用捨候先三日中向遠州動干戈候委曲近日以使者可令言上候條不
能重說候恐々謹言

八月廿八日

武田大膳大夫勝頼判

真木島玄蕃頭殿

一色駿河守殿

輝元公へ從武田勝頼之書札寫

雖未申通候抛遠慮呈一封候仍如從大坂被申下者被對公儀貴國深
重之忠憤故既至于備後被移御座之由候誠希代之御忠勤言宣不及
之至感激不斜候當口之事は勝頼雖小身候涯分東國之諸卒相催御

三百七十八

手合不可有猶豫候就中甲相越三和之儀被差下上使去歲以來被加
御下知候上は三箇國共に雖爲宿意重疊爭可奉違背候哉無二應公
命竭粉骨可勵戰功事勿論候然て織田彈正少弼向大阪築取出之地
利絶通路之處以船艦糧糧被運渡海之由寄特候其刻織田於難波浦
調兵船雖防戰候貴國之勇士無用捨押寄悉擊碎凶徒數千輩被討果
之由御名譽之至巨頭紙面候隨て大坂長之籠城一段窮屆候自然此
上不慮之凶事出來候は、可爲勞而無功御仕合候歟大坂堅固之内
其御行片時被指急可被違公私御本意儀肝心候委曲近日以使者可
申達候條不能一二候恐々謹言

八月廿八日

武田大膳大夫勝頼判

謹上

毛利右馬頭殿

從武田勝賴小早川隆景へ書札之寫

就遠遠貴國雖未申通候從大坂如承者被對公儀輝元無二被勵忠勤
至于備後國被移申公方様御座候之條願遠慮以飛脚申候宜預御取
成候於自今以後以貴國當方異于他申談公儀御本意可相持所存候
輝元御同心候様御馳走可爲祝著候仍織田向大坂取出數箇所相築
既通路不合期之由候處從貴國以船艦糧物渡海之由奇特候然刻敵
船支海上防戰候之處無猶豫被押寄忽擊碎凶徒數千餘被打果之由
心地能次第に候此上大坂無凶事以前早速至于京表輝元御出勢肝
心候萬乙大坂不慮之儀令出來候以、公儀御入洛可令遲々歎此所
大切候委細被遂而辨諫言可爲本望候恐々謹言

八月廿八日

小早川左衛門佐殿

武田大膳大夫勝賴判

從武田勝賴吉川元春へ書狀之寫

八重森源七郎回途之砌相加候飛脚下國に付預示候一々披讀抑荒
攝奉對公儀抽忠功信長敵對當時鋒楯半之由候偏貴國御本意之基
歷然候歎公儀御入洛天下御靜謐此節に候之條被進御動座中國西
國諸勢一同被卒之輝元御自身片時早速城都御亂入專要候先回度
如此趣申達候き於當口御手合は毛頭不可存用捨候此所有御勘辨
輝元可被及諫言條肝要候恐々謹言

正月九日

吉川駿河守殿

武田大膳大夫勝賴判

從輝元公元春へ御狀之寫

今度京藝和平之取沙汰定て東北國へ信長可申觸候間至甲州一人

差上之此子細申理可然と從隆景被申越候使柄之儀爰元短束仕候
乍去無案内之者共は不可相成候之間佐々木方儀被罷上候様に成
申間敷候哉爲此内儀申入事に候猶重て可申述候恐々謹言

卯月十日

右馬頭輝元判

元春

御宿所

宗瑞様慶長十年に御上洛被遊候と見え候て女房文に

女ゐんの御所へすわうの中納言入道のほりのよしにて銀子五枚
進上候よくこそとめてたく覺しめし候よしよくこそゝろへ候
て申まいらせ候し
なをく書に

此よしよくつたへ御入候へどのよし申まいらせ候し
上包に

慶長十

五十九 有之候慶長十年五月十九日と申事にて可

有之候哉

吉田物語附尾下卷終

此物語上中下三冊者

輝元公御代之内元龜年中より慶長三年迄御家來之衆中大小身共に戰場之御奉公に不限抽たる働之儀は其大概を書記して號吉田物語附尾予諸孫に授之訖老耄之誤猶々多かるへし依て他の披見をゆるす事なかれとまかいふのみ

于時元祿十五年壬午春日

周布氏族空潭是心
行年七十九歳書之

明治三十一年十一月二十日印刷

明治三十一年十一月廿五日發行

長周叢書編輯
兼發行者 村田峰次郎

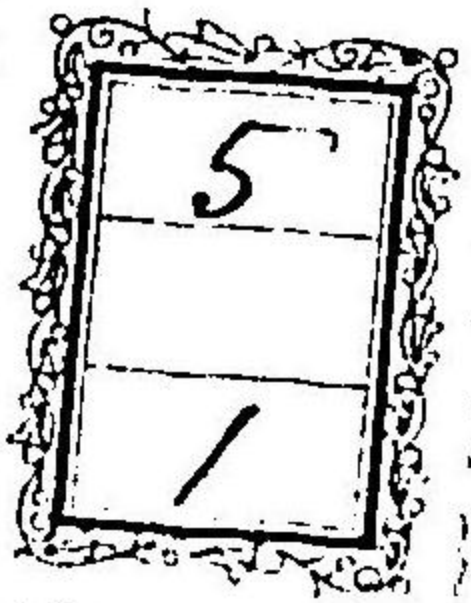
同 京橋區山城町六番地

印刷者 堀田道貫

(電話新橋 一一七七番)

同 所

印刷所 堀田印刷所



5
17
1

